海軍戰死者祭典

本日午前十時東郷大將青山墓地に卅七八年役海軍戰死者の祭典を擧行す。參內復命より滿一週日にして此事あり、未だ以て遲しと爲すべからず、若し東京市の歡迎に先ち、少くも實業團躰の歡迎に先ちて之を擧行せしならば、一層詩的たるべかりしも、種々の事情の許容せざりしに相違なく、今は改めて言ふほどの要なし。

凡そ凱旋者の忘るべからず、又た忘るゝを得ざるは戰死者にして、特に海軍にては、人員の多からざる丈け、司令長官は部下の諸將校と面識あり、下士卒の重なる者とも面識ある位にて、相互の關係は殆んど親族に類し、中には親族にも優れるありて、死者を憶ふも尋常一樣にあらず。祭典とて徒らに式場に列するにあらで、眞情の迫り、追懷に堪へず今更らの樣に動哭するあらん。

日本海々戰はトラファルガー海戰と並び稱せらるゝも、戰死者の數に著しき懸隔あり。大將は依然たり、各司令長官は依然たり、各艦長は依然たり、多くの將校下士卒は依然たり、犧牲と爲りしは一中佐を始め百數十名のみ、曾に該戰に於てに非ず、全役を通じ將官は毫く無事、戰死者總計二千餘名に過ぎず、陸軍に比し、損害甚だ少なくして、功績は則ち同等以上、隨て死者も比較的多く惜まるべし。多く死するも、少く死するも、死に於て一なるも、多額の產出が價格を減ずるは、此邊にも免かるべきに非ず、死者の少くして死甲斐あるかに見ゆるは、世間の通態と看做さゞる能はず。今日祭らるゝ人名は、長官に於て名薄なしに記憶するならんが、斯かる事は頊事に似て決して頊事にあらず。

從來海軍に武士的勇氣を要せざるやに考へられしに、閉塞隊の如き、實に戰士の模範を垂れたり、廣瀨中佐は軍神と呼ばれ、死して餘榮ありとすべく、他にも非常の事蹟ありて未だ顯れず、露國側より漸次知れ渡るあるべきが、斯くして戰鬪中に死せるは、所謂軍人の本望にして、安んじて瞑したるべけれど、掃海者くは封鎖に從事し水雷に觸れて沈沒せるは、均しく戰死なるも、聊か事情の異なる者あり。而して戰死者の過半が此の部類に屬すといふに至りては、頗る遺憾とすべし。而も三笠艦の內地に還り、軍港に碇泊しつゝ夜中俄然轟沈せしに較ぶれば、尙ほ慰むるに足る。生存者の眼には、死者は總じて不幸なるも、不幸なる者の中、自ら等差なからず。

在天の靈は各ゝ職分の爲めに斃れたりとして何等憾むるなきも、其遺族は如何に慰まんと欲するも、得て能くすべからず。此頃遺族にして歡迎會に招かるゝ多けれど、死者の僚友の愛てたく凱旋し、勇ましく談笑するを視、一は喜び、一は悲み、中途涙ぐみて退席する珍らしからず、未練らしけれど人情の自然と謂ふべし。されど將校の遺族は追慕の情に堪へずとも、必ずしも生計に窮せず、安んじて兒女の成長を待つを得べし。下士卒に至りては、下賜金及び扶助料あるも、一家を支ふるに困難を感ずる者少なからず、中には識らず知らず死者を辱むるが如き行爲を敢てする者なきを必し難たし、國難の爲めとはいへ、淺ましくも又た氣の毒なる次第ならずや。海軍は最近の戰役に於て絶大の名譽を博したれば、何事につけ一臺の遺憾なきを得んこと、最も望まし。遺族とて僅かに二千餘家なれば、之に善くする難きにあらず、而して實に既成の大功を玉にする者なり。惟ふに祭典執行者は既に已に之を計るの熟したらんか。（明治三十八年十月廿九日）

南洲墓前の祭典

野津元帥、伊藤元帥、井上大將、上村中將の一行は、滿洲視察の途次、鹿兒島に立寄り、西郷南洲の墓前に戰捷奉告祭を執行する由。南洲の大人物なるは年を經て愈ゝ明白を加へ、最近戰役の起ると共に、其の眞價に鐵案の下だれる觀あり。翁は謂ゆる小に闇く、大に明かなる者、軍事に於て大村山縣等諸氏に若かず、政事に於て大久保伊藤大隈等諸氏に若かず、國務を執りて無能の謗を免れざりしならんも、少くも露國の南下を看取し豫め之れが備へを爲しゝ一事は、他の擾々たる徒の到底企て及ばざる所なり。陸軍當局者が陸軍の爲めに盡くし、海軍當局者が海軍の爲めに盡くし、帝國の軍備を充實し、強國の班に列せしめたる、其の功績や尠少ならざるも、對露國の大方針を立て少壯將校を養成し皷舞せし南洲の如き、果して如何の人とすべきか。今の老將は當時其の思想の粗大なるに惘れし方ならざるか。

廢藩置縣は人の重大事と爲しゝ所、南洲の大藩に蟠踞せる、或は反對せんと疑はれしが、鳥尾氏の往て諄々之を論ずるや、彼れ徐ろに口を開て曰く、善し、他日外征に

際し大に盡力あらんとを希ふと。さすがの得庵も是に於て其の局量の大なるに驚かざるを得ざりき。鹿兒島暴徒の起れる、南洲の順逆及び死生の係れる所、海軍兵學校在學の同縣青年之を憂へ、往て事の顚末を問ふ、翁大に其の不心得を戒めて曰ふ、內國の爭亂は何かある、吾が一身は何かある汝等を兵學校に入れしは、露國の侵略に備ふるが爲のみ、即刻歸京して勉學せよと。一人は故ありて强て翁と死生を共にし、他は命の如く歸りて復校せしが、中に日本海に於て大に露艦を破りし者あり。翁は常人の憂へとする所を憂へず、常人の樂みとする所を樂まず、國家の大患を豫察し、全力を以て之に當らんとす、他に復た何の介意せるあらず。

固より毀譽褒貶に幸あり不幸あり、板垣氏にして板垣死すとも自由死せずの語を遺して瞑せしならば、恐らく自由の神として祭られ、或は東洋のワシントンと呼ばれたるべし。南洲にして生存し居らば、今の如く崇拜せられざるべしとの說は、强ち理なきに非ず、斯かる事の之れ無きを斷言すべからざれど、翁の城山に斃るゝ、齡正に五十、實に分別盛りにして、是れより大に性格の變ずべくも思はれず。子孫の爲めに美田を作らんと欲せば、之に先ちて作り始めしならん。賞典祿さへ二千石、美田を作るの機會は一にして足らざりしなり。唯だ君國の爲めに鞠躬盡力し、一身の利害を度外に措きしを以て、彼の如く生涯を送るの避く可らざりしならん。翁をして天壽を終へしむるも、銅像として立てらるゝは上野公園に於ける遊獵の風に於てせらるべしと察せらる。

翁は死生を超脫し、利害を超脫し、尋常の人事を以て律し難し。我が日本に世界の大人物に匹敵すべき者、秀吉の如き、家康の如きあるが、南洲の如き、多く類を見ずガリバルヂーに似てガリバルヂーより大なり、明治の世に斯かる人物の出でたるは、吾人の以て光榮とすべき所ならずや。翁の後進が陸に海に戰功を立て、祭典を墓前に行ふは、本を忘れざる者といふべし。戰捷を以て翁の力に歸するは、過ぎたりとせんも、全く棄てゝ顧みざるも恩知らずの嫌ひなからず、若し行賞の川上大將田村中將の靈に及ぶあらんか、亦た翁に及ぶの當然なるを認む。身は逆賊の名を負ひて斃れ、子は父の勳功を以て侯爵に叙せらるゝ、事既に奇、翁自らは斯かる邀に心を煩はさゞりしならんも、其の人物を偉とし、其の感化を大とせば、適當の時に適當の敬意を拂はざるべからず。（明治三十九年六月一日）

仁齋二百年祭及び東湖五十年祭

シルレル百年祭の日本に行はれしは、事の當に然るべきもの。彼は文學上の功を外にするも、尙ほ人の大に見るべきあり、我が文學者にして幾分か其の人に私淑する、則ち洵に慶すべしと爲す。則ち之れが紀念祭執行は寧ろ奬勵すべしと雖も、而も外國に於ける學界の偉人を紀念すると同時に、又た我が內地の偉人をも忘るべきにあらず。人文の功は一國に限るに非ずして、世界の上に稱すべきを稱するの妥當なるも、他國に於て紀念祭を執行するが故に我も亦た之を行ふべしといひ、而して自國に於て紀念祭を執行すべき偉人の存するを顧みざるは甚だしき陋事と謂はざるべからず。況んや東海の一島國に生死せしが爲めに名聲廣く聞えざれど、其の實力は優に雄を世界に爭ふに足る者あるをや、此等豈に大に紀念すべきに非ずや。我國は斯かる人に乏しからず、從來紀念祭の行はるべくして而も行はれざりし者多く之れ有るが、今年に就て言はゞ伊藤仁齋の二百年祭、藤田東湖の五十年祭は、其の主要なる者なり。此の二人は純文學に著るしき功なきにせよ、永遠に記憶を要すべき者たり。

神皇正統億萬歲、一姓相待日月光、市井小臣嘗竊祝、願敎文敎勝廣唐、是れ以て仁齋の心事を見るべく、願敎文敎勝廣唐の一句は、普通漢學者の中華を尊び己れ東夷を以て居りしと全く撰を異にす、其の朱子學を排して新たに古學を唱道したる、怪むに足らず。孔孟は固より崇拜物たりしと雖も、決して中華の人として尊びしが如き事あらず、天道地道人道より觀て是とすべきを是とし非とすべきを非とし、何人が如何なる解釋を與ふるとも特に自ら曲ぐるを肯んぜざりき。是より先き中江藤樹の陽明學を唱ふるありて、既に新たなる潮流の涌出せるを認むべきも、他の何學派といふに據らずして直ちに己れの胸臆より獨自の見解を創唱したるは、眞に彼を以て嚆矢とす。當時此に對して批難を加へし者到る處に之れあり、室鳩巢を始めとして頻に難攻擊し、中には其の學の吳廷翰より出でしを言へるも少からず。廷翰に比較すれば幾分の相ひ似たる無きにしも非ざれど、單に是れに據りて決して彼の如きを得べからず、猶自の力に賴りて深く研究せしに非ずんば、焉んぞ自說を主持し批難の間に門弟及び子孫に傳ふるを得んや。我國に於て兎も角も

支那哲學の上に一機軸を出だしゝは、先づ仁齋を推さゞる能はず。

教育にても、儒者之學、最忌闇昧、其論道解經、須是明白端的、若白日在十字街頭作事、一毫瞞人不得方可、切不可附會、不可牽合、不可假借、不可遷就、尤嫌回護掩其短、又戒粧點以取媚悅、と曰ひ、專主一家之學、則必先得其短處、日染月漬、卒爲終身之深害、永不可除、宜如披砂簡金、左沙右汰、悉棄去塵沙、斯得眞金、苟兼取旁搜廣求並著諸家之書、捨其短而取其長、則是非相形、彼此相濟、翫索既久、而後有一至正至當之理自在其中、非徒可免終身之害、而天下之書皆靡非吾師矣、孔門貴乎博學者、蓋爲此也、今如講朱王氏之學者、其宗朱學者、專讀晦翁之書、而至象山陽明之書、一不過目、講王學者、亦然、殊不知朱氏有朱氏之短長、王氏有王氏之短長、知其長、又知其短、是爲能知其人也と曰へるに觀れば、以て其の尋常ならざるを知るべく、飛驒佐渡靈岐三州を除けば日本全州の人幾くか其の門に入らざるなかりしといふに稽ふる、則ち如何に感化の廣く及びしかを知るべし。此の如く己れの見識を立て師道に從事する者は、大抵自ら居る高くして人に驕るの風あるに、仁齋は全く之れと趣を異にし、大宰春臺の如きも尚ほ曰ふ、余嘗見伊氏而與之言、觀其貌也恭、聽其言也從、余故以爲君子と、其の德行の人たるは何人も疑はざりし所なり。文章は其の緒餘なるも、齋藤拙堂が有氣魄光餘、使讀者不倦と言へりしを以て力量を想察すべし。

但し仁齋の言行として先哲叢談に載する所、必ずしも信を措くべきに非ず。嘗て倡家に入り、而して其の倡家なるを知らず、乃ち『意はざりき今の世善を樂み施を好むと此の如きものあらんとは』と言へりとあるは、或は炒豆を撒き、或は寺刹を過ぎて拜し、或は『好んで崖異を爲さず』とあると正に相ひ反せり、其の一石を見て此の石龍を生ずと云ひしに、後ち果して龍出てたりとあるが如き事の傳へらるゝを見れば、如何に妄譚訛說の傳へられたりしかを推すべし。當時人各〻其の師とする所を尊び、他を誹毀詆謗して到らざる無かりしかば、以上の訛說の出でしも偶然にあらず。祭文に、享年七十有九、身世莫謂不壽、門生桃季滿于天下、生前莫謂不顯、五男三女、令嗣敏學、身後莫謂不榮、嗚呼先生、可謂令終とあるは、以て蓋棺の評とすべきなり。元と仁齋の事は既に己に遍く世に知られ、特に茲に言ふを要せざるも、其の恰も二百年祭に相當せる今年に際し之を紀念する無くして已むは甚だ惡しゝ。當年の學問にして今日に傳はれるは獨り是れあるのみ、今尚ほ堀川學として其の

後裔の京都に傳ふるあり、京都に於ては何等かの儀式ありしが如くなるも、仁齋は區々たる京都の專有物にあらず、哲學に敎育に文學に必ず紀念とする所無かるべからず。

藤田東湖は正に五十年祭に當るもの、夫の百年祭といふと異なるのみならず、安政二年の震災に歿せし者にして、震災其物の紀念も不可なるに非ざるが、東湖の如きは半百年と雖も紀念を盛んにすべき價値あり。彼は維新前の思想を代表して活動せし者、今日謂ふ所の武士道は最も斯の人に就て見るを得べし、批難すべき點を求むれば之れ無きに非ざるも、武士の典型として誰れか其の右に出づるものぞ。當時親しく東湖に接して今日尙ほ生存せる者少からず、海江田氏を始めとし、他に種々之れ有り、惟ふに何事か紀念の用に供せらるゝなるべし。今は戰役最中にして、他に爲すべき事甚だ多く、過去の紀念に注意を拂ふの暇あらざらんも、既にシルレルの百年祭を執行せし程なる、則ち此等の紀念祭は宜しく莊重に執行すべき筈ならずや。他國に於て之を執行せしが故に我も亦た之を執行すとし、自國の恩人を遺棄して顧みざるは、稱すべき事にあらず。

三十八年六月五日）

ピット百年祭

來る二十三日、英國に於てウヰリヤムピット百年祭を擧行す。ピット時代の英國は頗る現代の我日本に似たり、多樣の困難を排却して進歩を遂げ、進歩を遂ぐるかと見れば更に一層大なる困難の前に横はるに逢着す。印度に佛國の勢力を芟除し英領印度帝國の基礎を鞏くせしも、米國に於ける殖民地は佛國の援助を得て獨立したり。次いで佛國革命起り、歐洲の諸强帶兵干涉を試みて佛の運命旦に夕を測り難たき有樣なりしに、却て兵を出して四境の敵を退け、不世出の英雄奈破崙の現はれ、覇を世界に唱ふるや、英國は初め革命の氣運の移り來たるを恐れしに、重ねて兵を以て侵されんことを恐れ、百方防禦の策を講じて已まず、佛西聯合の一大艦隊亞米利加を指し、更に轉じて逆航し來るに方りては英國の運命は頗る危きものゝ如く、幸にネルソン提督能く劣勢の艦隊を以て之をトラファルガーに壓し、敵艦隊を殲滅して全く海上權を握ることを得たり。されど露墺兩國と同盟して佛國を征せんとせし計畫は、アウステルリッツの大敗の爲めに破壞され、ピットは此に落膽して

死を早めたりといはる。爾後奈破崙の武運或は盛んに、或は衰へしが、其の趨向容易に判せられず、若し少しく持重して勢力を培ふに眄めしならば、其の最期は彼の如く悲慘ならざりしならんに、功業を急ぎ、準備を粗にし、大舉して露國を伐ち、酷烈なる天候に惱まされて大敗し、四十萬の大軍、還る者僅に三萬、勢ひ復た振はず、而して英のウエリントンは其の衰へしをウォータールーに邀へ擊ちて勝を得たり、是より英國の威力大に揚がる。

我が日本帝國の國運は豫め測り知り難かりしあり、初め琉球臺灣を淸國と爭ひ、後ち韓國を淸と爭ひて之を破り、更に露國と爭ひて之を破り、其間幾回の變轉を經、窮するが如くして漸く通じ、通ずるが如くして又た困難に會し、健鬪して以て今に至る。露國は今や內憂に苦み、輙く收拾すべからざる形あるが、能く之を鎭壓して再び力を四境に伸ぶるか、將た大革命と爲りて全く異なりたる國狀を現出するか、他の列國は各〻此に應じて變ずる所あるべく、我も亦た幾許か變ずる所なきを得ず。即ち我國社會の狀態は頗る當年の英國に似たるも、列國の狀態は百年の進步を累ねし今日の有樣にして、規模の雄大なる同日に語るべからず。但だ我が帝國の大に興らんとする徵候は炳として明かに、ピット其人の如き大有爲の傑物の出づるあるか、將た多くの人物共同して一層偉大の力を顯はすか、事實の之を示すを待つべきのみ。

ピットは十九世紀初期の英國を飾れる大政治家たり、其の一身を以て內外の困難に當り、屈せず撓まず、飽くまで國威を發揚せんとして盡瘁せし事蹟は人の普く知る所、特に茲に絮說するを要せざれど、樞要の地位に立ち、能く難局を處せし者、ピット以後一二に限らず、中にも獨逸のビスマルクの如き、實に一層大なる手腕を揮ひし者にして、斯かる點よりせば種〻の評論を免かれざらんも、ピット一代の經歷を稽ふれば、他に多く類なくして而も是非の遽かに決し難たき點二あり。其の一は少壯にして能く大事に當りたるピットの如き者あらざること是れなり。人は猶ほ學校に在りて試驗に汲〻たる年齡にして早くも總理大臣と爲り、歐洲紛亂の渦中に投じ、少壯政治家の能く事を堪ふるを事實の上に證明せしが、其の彼が如くなりしの果して大に歎美すべきやは亦た疑はし。ピットは正さに二十四歲にして大政を燮理したるも、本來極めて早熟の資、兒童たる時より旣に大人の風あり、言語動作の小

兒らしからざること珍らしからず、若し早老に終らざりしならば、眞に少壯の爲めに萬々丈の氣を吐く者とすべかりしに、四十八にして身體疲憊し、恰も老衰者の著死するが如くして逝去せり。由りて察すれば、彼は早熟せる一種特異の人物にして、極言すれば一の畸形兒たりしやも料られず。されど少壯にして一國施政の重任に當り、紛亂四集の裡に立ちて、能く大事を成し遂げしを看れば、固より人傑たるを失はず。

其の二は國家の財政を處理するに巧みにして一身の經濟に介意せざりしと是れなり。謂ゆる志天下の掃除に在り一室の事何かあらんの概、ピットに於て之れを見る。生來愛國心强くして、專ら意を國事に注ぎ、偏に國家の利を先にして毫も一身の私を營まず、隨て國家の爲めに計ること極めて緻密にして、一瑣事といへども苟もせず、爲めに心身を苦めて到らざる莫かりしが、己れ自らは負債山積し、年俸六萬圓、時として十萬圓に上りしに拘はらず、死後に及び負債償却の料として四十萬圓の支出を議會に決したる、是れ其の全く家計の事に介意せざりしが故にして、若し蓄財を念とせしならば、富を造るべき機會は極めて多く、幾百萬幾千萬の財を積むも難からざりしに、己れは則ち鱉毛の蓄積するなく、如何に貧するとも絶えて不正の疑を受けず、中外の人をして清廉潔白を稱して已まざらしめぬ、其の能く民心を收めて大事を決行し得たる、蓋し偶然ならず、固より常人の企て及ばざる所なり。而も其の公直廉潔、國家の利權を先にし一身の私益を營まざりしは洵に賞賛に勝へたるも、彼の山積せし負債に至りては決して稱すべき事ならず、マコーレー彼を評し、若しペリクレス及びデウヰットの至誠に兼ぬるに其の質素を以てせしならば其の德は一層輝きしならんと言へる、或は肯綮に中たれり。但し斯くまで備はらんことを求むるは酷に過ぎん。

ピットの少壯にして能く大功を立て、清廉にして毫も私利を營まざりしは、他の政治家の老耄して權を爭ひ、公事を利用して私利を計るを戒むるが爲めに生まれ出てしに非ざるなきを得んや、斯の大任を負ひて天より降れりと謂ふも溢美ならず、百年祭は之れが注意を喚起する者なり。されど彼等擾々たる貪汚の老輩は、爲めに反省する程の良心ありと見えざるぞ憾めし。（明治三十九年一月二十日）

モツァルト誕生百五十年

來る二十七日、モツァルト誕生百五十年祭、洋の東西に行はれんとす。モツァルトはベートーヴェンと相ひ並びて世界の二樂聖として尊ばれ、今日の人音樂を解するとと解せざるとを問はず、神の如く之を尊敬するが、二人共に生時に於て落魄を極め、貧困と苦鬪して終に窮死したる、眞に驚くに堪へたり。

モツァルトは年市めて四五歳、既に一の音樂者たり、漸く長じて諸方に樂を奏す、天成の妙技到る處に喝采を博せしも、而も常に窮困し、飢えて食を得ざりしこと稀れならず、報酬として時計若くは卷煙草函の類を受くるの屢〻なりしも、金を受くること少かりき。千七百九十年、正に名譽の絶頂に達せしが、其時さへ尚ほ舊友プッペルヒの門前に立ちしとあり、偶〻受けし所の僅少の金は、或は友人の爲め、或は病妻の爲めに使用し、其の翌年十二月、三十六歳を一期として墺都維納に逝けり。

時に天寒く雪降り、誰れ一人來り送るなく、唯だ遺體のみ他の十五體と共に貧民の共同墓地に埋葬せらる。後ち千八百八年、一外國人の來りて其の墓を訪ふあり、多方搜索すれども發見せず、之を土地の人に質だしゝに、貧人の死屍は一たび埋葬せし後、更に葬るべき死屍の到れば之を別處に移し易ふるが爲め、轉〻移りて所在を失ふもの少からずとの答へあり。モツァルトは、其の永眠の場たるを紀念すべき一片の石さへ存せざりしなり。

彼が如き境遇に在りしモツァルトは、世に對して不平を懷きしこと勿論なり。嘗て巴里に行くや、怒りて曰ふ、佛人は盡く驢馬なり、歌ふこと能はず、叫ぶのみ、其の言語は惡魔の發明せし者なりと。歸りて後ち全く佛伊兩國の風を拋ち、ひたすら眞の獨逸風を涵養するに努めたり。

音樂は耳より腦に入り、見ること能はず、觸るゝこと能はず、全く內心の事に屬す。故に世に對して懷に快からず、若くは他の迫害を受くること多ければ、其の多き丈け益〻逃避の場所を此處に求め、專心一意、以て慰安を得るに勉む、要するに天下に棄てられて初めて樂の神に到るといふべし、モツァルト則ち然り、ベートーヴェン亦た然り。尤も樂の神に到るは必しも然らざるべからざる理なく、幸に時運の好きに會へば、生計に窮せずして尚ほ該域に到達するを得んも、而も是れ誠に難いかな。

後世の音樂者、技藝に傑出せず、而して百方金を貪ぼりながら、此の二樂聖が敢て身を卑くして他に屈せざりしを聞き、乃ち之に倣ひて倨傲自ら高しとするあり、心得違ひの甚だしきものなり。たゞ夫の二樂聖の如くして初めて之を恕すべく、又た益〻其の憫むべく慕ふべきを見る。（明治三十九年一月二十日）

尼將軍

漢家鴻業附踏呂。　休怪元勳跡欲無。
曾是金函託鳩毒。　斯鳩久被牝鷄愚。

シヨパン及びメンデルゾーン誕生百年

本年は二大音樂家誕生百年に相當す、即ちメンデルゾーンは千八百九年二月三日に生まれ、ショパンは同三月一日に生まれぬ。共に身體虚弱、一は早く神經衰弱し、三十八を以て沒し、一は早く肺結核に罹り、四十を以て沒せり。されど其の短生涯に作りし所は永く世に傳はり、ショパンは既に爭ふべからざる位置を與へられ、メンデルゾーンも初め疑問の伴ひしに拘らず、歳を逐ひて價値を認められ、本年に入り二人均しく樂界稀有の天才として迎へらる。王侯將相にして斯く紀念せられざる、何ぞ啻だ一二ならんや。

音樂は神經を興奮し、短命に終らしむとの說は、事實を以て證據立てられず、アウベル八十九、ケルヴニ八十二、ロシニ七十八、ヘードン七十七、ラランド七十六、バイジエロ七十五、スポール七十五、ハンデル七十四、グルック七十三、ピッチニ七十二、マイエルベール七十、バレストリナ七十、スカルラッチ六十六、バッハ六十五、其他長命なるの少からず、ベートーフェンと雖も、五十七に達せしなり。而も夭折せし例を擧ぐれば、バル

セル三十七、モツァルト三十五、ベリニー三十三、シュベルト三十一、ベルゴレヂー二十六、尙ほ他にも擧ぐべきあり。今回誕生を紀念せらるゝ二人も此に屬す。

メンデルゾーンは幼にして嚴格なる敎育を受け、年長者の間に成長せしも、一生を通じ小兒らしき單純なる性格を失はざりき。小兒の如く無邪氣にして、好みて菓子を食ひ、而も高尙なる藝風に熱衷し、爲めに勉勵して倦むことなく、加ふるに野鄙陋劣を憎むこと最も甚だし。虛弱にして業に勵み、實に身體の堪へざる所なりしが、尙ほ幾許か堪へたりしは、善く眠り、善く食ひしに因る。時として興奮の餘り、精神錯亂せるかに見えしが、人介抱して床に臥せしむれば、十二時間も死せるが如く熟睡し、以て常態に復するを得たり。其の妻との關係は明かならず、妻は死に先ちて夫の與へし書翰を燒き棄て、後より稽ふるに由なし。

ショパンは父母に鍾愛せられ、其の行き屆ける看護にて辛うじて成育せり。筋肉の發達せざりし爲め、長じて男か女かの辨識されず、宛ら寺院に飾らるゝ想像的人物の如し。激するの稀れなるも、胸底に情念の燃え、家族に對し、祖國に對し、又た藝術に對し、抑へんとして得ざりし者あり。國敗れて他邦に流寓し、憐れなる、悲しき情は、奏樂の上に顯はれたり。雜閙を好まず、靜閑を求めしも、聲名既に世に聘せ、絕えず高名なる人物に襲はれ、ヂョルヂ・サンド(ヂユドバン男夫人)の如きにも熱心に附き纏はれたり。

サンドは南海に赴て看護に務めし程にて、ショパンは之と結婚すべしと傳へられ、彼れ亦之を豫期せしが、サンドは結婚に關して特殊の意見を有し、以て男を束縛し女を束縛すと爲し、自ら斯く束縛せらるゝを肯んせず、ショパン其意を解せず、怒りて之を罵り、二人遂に永く相ひ別るゝの餘儀なきに及べり。是よりショパンの健康益〻惡しく、容貌も全く一變せり。サンドに代りて門弟グットマン親切を盡くしゝかど、主治醫モランの死してより、復た何人をも信ぜず、常に臥床に横はり、口を開かざりしが、一夕日の將に沒せんとせる、忽ち起き上がり、ポトッカ伯夫人の泣きつゝあるを觀、謠へよと叫ぶ。友人隣室よりピアノを運び來り、伯夫人之れに和して謠ひしが、美なる哉神よ、美なる哉、再びここといひ、其の繰り返へさるゝ間に感覺を失へり。伯夫人は才貌双美を以て名あり、聲甚だ美なり、肖像は伯林美術館に保存せられ、其の寫眞は到る處に掲げらる。

ショパン及びメンデルゾーンの如何なる樂風なるかは、其作曲の我國に演せらるゝ少からず、音樂に志ある者皆な之を知る。今は其の憐むべき短生涯の聊か詩的なるを叙し、以て誕生百年の紀念と爲す。（明治四十二年三月一日）

靜姬

辛苦墓君孤影寒。何堪怨拜神祠。
鵑魂原上東風惡。偏向舞衣悲恋吹。

誕生百年の紀念

本年を以て誕生百年に相當するは獨り二大音樂家のみに非ず、大政治家リンコーン及びグラッドストーン、大科學家ダーウヰン、大詩人テニソンも同じく然り。過去を顧みるは、猶ほ將來を察するが如く、文明の進むに隨て益ゝ著しく、實に現在の生活をして趣味に富ましむるに與るや多し。過去を顧みるを以て守舊の習ひとするは頗る謬る、人生の事豈に過去を忘れて然る後に向上を期すべきほど窮窟なる者ならんや。修養の途は多岐なるも、偉人豪傑を追憶し、其性格及び行藏を考ふること、最も有効なる方法の一に居る。

昨年、我國四名士の五十年祭あり、是れ亦不可ならず、而も五十年よりも、誕生百年と死後百年とに何等かの紀念式を執行するは、多くの場合に適當なるを覺えずや。東洋には本年誕生百年として彼の大人物に比すべき無く、前後幾年を通じてさへ之れ無きに似たれど、事は必しも人物の大小に拘るべからず、況や大小の差別は概ね境遇に依るもの、若し歐米に生れしめば優に世界的の觀を呈したらんと察せら

るゝの稀ならざるをや、彼の如くならざれば彼の如く紀念す可らずとは、斷して是認するを得ず。而も本年特に言ふべき無し、三年前藤田東湖、明後年佐久間象山、則ち相當す。

グラッドストーン、ダーウキン、及びテニソンは、十九世紀に於る英國の三傑として妨なく、活動の方面を異にして各〻超出し、而も性格に於て均く歎美するに勝へたるが、少くも表面の影響よりし、ダーウキンを第一に推さゞる能はず。リンコーンが米國にてワシントンと並稱され、近年動もすれば忽して登らんとするは、一は事功の絶頂に攀れし爲めなるも、又た實質の之に値せる無きに非ざらん。其の重ぜらるゝは、即ちグラント、ルーズヴェルト、タフトの大統領に當選せる所以の者とす。米には尚ほ多能なるホルスムの記憶すべきあり。（明治四十二年三月十五日）

藤田東湖五十五年祭

十月二日、茨城縣教育會主催と爲り、藤田東湖五十五年祭を執行す。五年前、五十年祭あるべくして之れ無かりしは、人の往々怪みし所、昨年吉田松陰、橋本景岳、梅田雲濱、賴三樹の五十年祭ありし故か、又は他に理由ありてか、茲に祭典の執行を見るは、後れたりと雖も、固より無きに優る。十月二日は舊暦の儘にして、新暦に改算すれば、四十日後なるべきも、かゝるは便利に從ひて不可なし。東湖の紀念祭は、單に一地方に於てせず、更に帝都に於てすべき筈なるに、絶えてさる催しなきは、聊か疑を容れらる。事實上東湖の世に推重せらるゝ、往年の如くならず、動もすれば明治の新時代と沒交渉なりと認めらるゝは、其の性行の爲めならず、水戸人士の冷淡に流れしが爲めならずや。井伊直弼の銅像が横濱に建設され、批難聲裡に儼として屹立するは、對薩長の反感に助成せられしにせよ、舊彥根藩の力に依らずとせず。水戸人士も此邊を考へたるべきも、東湖の死後、黨爭の烈しく、互に居りて剩さず、先進者の事功を稱揚する餘裕なきに及べるならん。今回の五十五年祭は、先進者が

身を犧牲にせし地より新たに人物の輩出せんとする徴候ならざるや、否や。

偉人は獨り出でず、一の偉人の出づれば、他にも偉人の出づ、所謂氣運なる者なり。舊幕の末、全國を通じて活氣の高まり、何の方面にも相應の人物の現れたるが、稍〻藤田東湖と社會に於ける位置を同くせしは、佐久間象山及び山田方谷なり。方谷は文化二年に生れ、東湖は三年に生れ、象山は八年に生れ、略ぼ同時代に活動し、各〻或る範圍内に感化を及ぼせり。後より觀れば、方谷最も振はざれど、初め頗る衆望を負ひたるらしく、鹽谷宕陰、安井息軒を訪ひ、談當世の人物に及びし時、息軒の東湖を推し、〻に反し、宕陰は方谷を推し、學問ある東湖なりとせり。後ち宕陰は斯く方谷を稱せず、其の久しく都に出でず、先生ぶりて學問の開けず伸びざるを歎ぜし由。さる形跡もありたるべきが、時代より言へば、東湖象山を擧ぐる限り、方谷を擧げざる能はず。若し此等に先ちて高山彦九郎、林子平、蒲生君平あるを念はゞ、東湖は高山より思想及び實行力に富み、方谷は蒲生より思想及び實行力に富めりとすべし。固より天禀の如何は容易に知るべからず、前の三人をして後に生まれしめば、異なれる行動に出づべく、後の三人をして前に生まれしめば、異なれる人物として顯はれたらんも、兎に角後は後だけ確に事功の大を加へたり。之と同じく、維新の三傑は、果して能力の超越せしやの必し難きも、事功に於て更に幾倍の大を加へたり。而も西郷は東湖の敎を受け、木戸は間接又は直接に象山より聽きし所あり、多大の影響あらずとも、何程かの關係を察すべし。西郷の東湖に關係ありて、而も東湖より活躍し得たる、猶ほ木戸の象山に關係ありて、而も象山より活躍し得たるが如し。方谷の門人にして顯はれし者、河合繼之助あるも、其の内政を整ふるに專らなりしは、大久保と系統を同くせずとせず。而して大久保の方谷より活躍し得たる、他二人に準ずべし。人物か時勢か、人々見る所を異にすれど、時勢の與かるの少からざるを忘るべからず。

東湖は個人として性格の尊重すべきも、別に水戸の勢力を代表し、水戸の思想を實現せし者、水戸の盛衰に伴ひ聲望の消長を來すを免れず。水戸の衰弱せしは即ち其の後世に於ける松陰の如くならざる主なる原因なり。而も水戸の一盛一衰は勢の避く可らざりし所にして、初より彼の如く推し移るべく定まれり。水戸は形體に於て幕府に屬し、精神に於て勤王を事とし、平素何等相ひ悖るなきも、一旦故

障の起り、二者の關係を案ずや、頗る進退に苦まざるを得ざりき。源平以來、實權と名分と別かれ、朝廷に軍隊なく、幕府に爵位なく、時に變化あるも、概して兩立の認められ、朝廷より敬ふべき無く、幕府より畏るべき無しとせらる。足利氏の功臣土岐頼遠も院を凌辱せしとて斬首の刑を受く。織田氏、豐臣氏を經、德川氏に入りて事益々整ひ、三國の大名も路に貧せる公卿に會ひ、輿を出てて拜禮し、以て奇異とせず、奇異とする者も公卿の空ら威張りとして明けて通すの有樣なりき。封建は斯かる狀態にて存在し持續せしが、水戸は其の由來を尋ね、現に務むべきを明晰にし、更に將來に亘りて示す所あり、いはゞ經典を作り、自ら遵奉し、併せて國民に宣布したり。幕政を合理的に解釋すれば、水戸の試みしが如くなりしと謂ふべし。然るに對外的關係よりして國勢の一變し、主權の所在を明白にするの必要を生じ、幕府に密接なるは幕府を主とするに傾き、此に疎遠なるは朝廷を主とするに傾けり。水戸は情緯を佐幕にし、主義を勤王にし前者の爲めにせば大義に背き、後者の爲にせば至情に背き、其の孰れにも偏する能はず、義を枉ぐるか、情を矯むるか、自ら決定すべき場合に臨み、相ひ抵排し、相ひ殺傷して盡くるの已むを得ざるに及びぬ。幕府創設の當初、重盛忠孝兩全を難んじ死を祈りしと同じく、幕府の破滅せんとせる、水戸先づ自滅を敢てせり。其の自滅せしは、幕府の爲に割腹し、之をして行くべき道に行かしめしなり。七百年持續せし幕府の最後を壯にせしは水戸の自滅にして、次いで起れる戰爭の如き、其の餘波に過ぎず。それかあらぬか、困果應報の拘るべきにあらねど、幕府の後を承け、新政體の下に最榮位を受くるは、紀州にあらず、尾州にあらず、水戸藩士の遺子其人なり。東湖は波瀾の極まらざるに先ち、有る限りの力を盡くして之を緩和せんとし、而して震災の爲めに斃れしが、或は斯くして刺客の毒手を免れしを幸なりとせん。幕政と維新との過渡期、東湖は正に其全部を代表せり。

水戸は紀州尾州より小なれど、三十五萬石の格、單に藩として爲すよ有るに堪へたるべきが、信濃松代は十萬石、備中松山は五萬石、其に比較的頗る小藩にして、藩力にて事を成すの困難なるは言ふ迄もなく、偶ゝ象山及び方谷の苦心を察するに足る。而も別に少しく考ふべき事情ありといふは他に非ず、從來兩藩幕府に關係多く、且つ當時の藩主眞田幸貫及び板倉勝靜、共に人を見るの明ありし事なり。幕府

の實務は老中以下之に當り、三家三卿も之が傀儡たることあり。佐久間象山及び山田方谷は、能力の人に過ぎたりしも、藩主の老中と爲り大勢に通ぜしより利益を受けたる無しとせじ。象山は識見時流に超え、而して信ずる所を貫くの意氣及び固執力あり、眼一世を曠くせるの偶然ならざれど、素筌は漢學に在り、自ら以て易に得る所ありとせり、蘭學に通じ、蘭書にて知識を得たりと傳へられ、實際何等か得たるに相違なきも、此點に於て多く重きを置くべからず。黒川良安に漢學を敎へ、良安より蘭學を受けしが、一日良安に舍密(化學)の事を尋ね、良安諄々として說く所ありしに、象山遮ぎりて曰ふ、さる事柄は易を讀めば皆な解すべしと、復た聽かんとせざりき。其の新知識を求むるの粗雜なる、推して知るべきか、而も蘭學者の爲さんと欲する所を爲し、尙ほ其の爲し得ざる所に出て、一切の新知識を双肩に擔ひしかの觀あるは、判斷力に富み、一を聞て十に働かしたればなり。隨て蘭學者と同樣の事を成すも、絕えて飜譯模倣の跡なく、開港を主張するも、强者の前に膝を屈するの態度に出てず、對等以上の位置を占め、大に世界に爲すこと有るべきを期せり。其の計畫せる所、間〻粗笨にして、實行に難きも、要するに自國を本位として外交を事とせんとし、之が爲め成し得る丈けを成し、たとへ攘夷論者をして一々首肯せしめざれ、識者をして耳を傾けしむるに餘りありたり。藤田東湖と意見の背馳せる狀あるも、事實に於て頗る相ひ近く、東湖の國政に處する對外方面を受持ち、之を發展し進達し得たりと謂ふべし。

方谷は象山と性格を異にし、學びて深きを求め、計るに緻密、行ふに着實なるを欲せり。不幸にして學ぶ所知る所當時の最急務を處するに適せず、僅に小藩内に行ふべく、動搖して將に亂れんとする全國に施すに餘りに平庸なるの嫌ひあり。蘭學を修むれば必ず精しく、舍密を聽けば必ず聘めんとし、兵事に、政事に、亦た然るべく、能く胸腹に消化し、之を事實に施せば、大に見るべきありたらんが、勢の不可なりしか、新たに學ぶに務めざりしは、象山と同じく佐藤一齋に就き、而して事功の著るしく異なるを致しゝ素因ならん。陽明學の造詣に於て、方谷の方遠く象山の上に出づべく、而して實際象山の方簡易直截、陽明の眞意を得たる形あるは聊か奇なりと爲さゞるべからず。されど方谷より觀れば、蘭學を修め、舍密を學ぶが如き、物を翫ぶに近く、良智良能を磨くの効多きに若かずとも見えたるべし。陽明學者は往

々にして知識を輕んじ、知識に乏し、方谷の學才ありて漢書に精通するに止まりしも、或は其の弊を受けしならんが、他の一面に於て確かに理の聰くべきあり。中江藤樹一村に閉居して化遠きに及び、門人熊澤蕃山、一國に施設し、他藩をして則るべきを知らしめぬ。方谷が蕃山の居りし處に居り、天下に爲すに足るを思ひたるは、事の自然なる者若し蕃山の時に生るれば、其れ以上に出でたらんも測られず。但だ世の狀勢は全く變じ、地方の安寧を計るよりも全國の安寧を計るの更に急にして、象山の中央に疾呼せしは、方谷の地方に模範を示しゝに比し遙に効ありたり。方谷の施設は根柢に益あり、東湖の國政に處する對內方面を受持ち順次經營を進めたりと謂ひて妨げず。世亂れて成績の顯著ならざりしこそ遺憾なれ。

東湖、象山、及び方谷の三人、皆な性格を異にしつゝ、獨特の長處を發揮し、各自の職分を果せりとすべきも、姑く其の性格事功に徵し、今日の社會に立ち如何なる地步を占むべきかを考ふるに、若し專ら政界に就ていへば、藤田は實に總理大臣の器を具へたりと爲す。國家の重きに任じ、事に當るの誠實なる、將た大局に着眼し、能く群豪の心を攬れる、多く得難きの首相ならん。他の職にも堪へざるに非ざれど、首相ほど適任なるは無し。佐久間は外務大臣の器なり、自ら高くして人に下らざるは、應酬の圓滑を缺くやに憂へらるゝも、決して徒らに頑强を喜ばず、陸奥の滑脫なきも、轉ずべきに轉じ、而して幾倍の信用を博したるべし。經歷次第、陸軍大臣又は海軍大臣たるの適當ならんが、文部大臣と爲れば森に似て更に良績を擧げたるべし。山田は內務大臣の器なり、大藏大臣又は農商務大臣又は文部大臣と爲るも可なり。藤田首相の下に、佐久間外相、山田內相あらば、內閣は頗る重きを爲すべし。各〻事功の一地方に限られしが故に、或は其の閣員たるの器を認めず、閣員に準ずるを以て奇異に感ぜんも、實は何の奇異なるあらず。薩摩の西鄕大久保が入閣し、長州の木戸廣澤が入閣せしと少しの差違なし。經歷よりせず、個人の能力よりせば、薩長出身者に優れるもあらん。其の大臣と爲らず、一藩の臣として終りしは、時勢に外あらず。國政の衝に當らざりしを以て云〻するは、淺薄も甚だし。

東湖、象山、及び方谷、皆な一生を困苦の裡に過し、骨て富貴を樂みしが如きあらず。身分より言へば、或は榮達せりとせんも、事志と違ひ、空しく詩文を以て不平を遣るの已むなかりしこと、逆境の人と云はざるべからず。世俗の謂ゆる成功の意義に

於て多く言ふを値せず。されど身後の名は達人の意に介せざる所にせよ、幾分か成功の大小を判定するの標準たり。目下の成功者流にして、數十年後、夫の三人の如く人の頭腦に印象を與ふるは幾人かある。成功の何たるかは人毎に說の異なるも、身の死すると共に消滅し、或は死するに先ちて既に消滅するは、果して憾なかるべきか。使我身後名不如即時一杯酒とは一種の達觀なれど、世の擾々たる者、能く爾く達觀するか。世說に曰ふ、人の福運は一定の量あり、初め多く得れば後に得る所少く、初め少しく得れば、後に得る所多しと。事實の斯く算盤的ならざるは勿論なるも、何程かさる形跡の認められざるに非ず。三人の中、方谷比較的最も安樂なりしが、其れ丈け後世に及ぼすの最も薄きを見る。能力に於てさまで優劣ありと思はれざるに、少くも俗間にて東湖及び象山と同列にせられざるは、生前既に得る所ありしに因ると解するあらずや。藤田東湖の名は漸く凡衆より遠ざかれるも、開國以來の帝國の發達を考ふる毎に茲に念ひ及ばざるを得ず。五十五年祭は現に一地方に限らるれど、百年祭若くは類似の祭典は更に規模を擴張せられん。明後年は象山誕生滿百年、知らず何樣の催しあるや。（明治四十二年十月一日）

吉田松陰五十年祭

二十一回猛士、松陰吉田寅次郎、安政六年十月二十七日刑死し、本年五十年に相當し、緣故ある地に紀念祭を擧行せらる。月日に暦の差あり、新暦なれば十二月上旬なるべきも、便利上其の差を認めざる習ひ今回も亦た然り。猛士の事は生前より既に知られ、死して益ゝ知られ、而して歲を逐ひて愈ゝ益ゝ知られ、凡そ維新前の殉難者にして此の如く世に顯はれたるあらず。藤田東湖の如き、稍ゝ此と社會の位置を同じくし、事功の分量に於て優りしに拘はらず、安政三年に震死し、數年前正に五十年祭の行はるべかりしに、絕えてさる催しの聞えず、況や他の多くは漸次堙滅するの避く可らずとせらるゝに、獨り猛士は反比例に益ゝ顯はれ益ゝ欽慕せられんとする狀あり。是れ出身地なる長州が薩州と相ひ並びて明治政府の主なる勢力と爲り、次いで薩州を凌駕し、伊藤山縣等數氏が元勳の隨一と目せられ、其の由りて來れる所を察する毎に、猛士に想ひ到り、之を以て源泉とするにも因らんが、又た猛士の此に値する者あるに因らずとせず。人は生きて境遇の順逆あるのみなら

ず、死して後も尚ほ之れ有り、或は生きて順、死して逆なるあり、或は生きて逆、死して順なるあり、或は共に順なるあり、或は又た共に逆なるあり、猛士は生きて甚だ逆、死して順の最も順なるを得たり、豈に謂ゆる一世に屈し百世に伸ぶるものか。

されど猛士は二十九にて死し、今日なれば大學を卒業して間も無き年齢とすべく、さばかりの短生涯を以て成し遂げし所に據り、人物としての全輪廓を判定するは寧ろ不可能たるを免れず。櫻田の刺客をして天壽を終へしめば、人の此に對する感想の如何なるべきや。赤穗四十七士特赦の說の出てしとき、折角義士の名を博せし者をして後日汚行の爲めに汚名を負はしむるは遺憾の次第なり、宜しく切腹して風敎の維持に與からしむべしと斷言せしあるは、一概に酷論なりとせず。猛士は實の名に副ふも、若し壽ならば如何に生涯を送りたるべきや、遂に之を確かむるに由なし。人に早熟早老なるあり、晩熟晩老なるあり、或は早熟晩老なるあれと、平均して言へば、三十ならずして死するは、僅に序幕の開け、後の幕の開けざると同く、或る程度まで性格を知り得べきも、到底其の總てを盡すべからず。

而も猛士の事は頗る詳かなりと謂ふべし。近來各方面に亘て史料の集められ、維新前後に係れるも少からざれど、殆ど一も材料を悉せりと爲すべき無く、或は記錄の足らずして事實を知るに苦み、或は記錄の多きも之を公にするを禁ぜられ、或は事實を知る者の現存しつゝ、容易に人に語らずといふ有樣にて、未だ事蹟の詳かなるあらざるに、中に就て猛士の事は比較的詳かなりとすべし。固より比較的にして、充分なるに非ず、今後尚ほ新たなる材料の得られんも、既に知られしのみにても、決して少しとせず。他に何人か經歷の斯く知られたるあるか。事蹟の傳はるは概ね後半生に係り、前半生は多く言ふべき無し。猛士の三十年未滿は辛うじて半生に達せしに過ぎざれど、事蹟の詳かなること尋常の一生に勝り、優に是非得失の評論を下すべく、性格を量るに於て不足を感ぜざるが如し。されど其の半生は或る一種の時代に限られ、其の時代に對してこそ識力及び才力を見るを得れ、他の異なる時代に於て如何なるべきやを察するに難んぜざる能はず。常に逆境に居り、人生の消極的半面を現はし、他の半面は後人の想像に任かしぬ。項王なり、歷山大王なり、三十前後にて死せしも、略ぼ爲し得る限りを爲し、長壽して榮ゆるにせよ、又た衰ふるにせよ、前半生の附錄たるに止まり、前半生を以て才能に併せ性格を認

め得るが、猛士は曾て順境に入らず、順境に在りて何ほど才能を揮ひ、如何なる性格を露出すべきやは漠として知られず、察せりとするあるも、他人は聞いて容易に是認せず。實に猛士は半面を世間に現はし、半面を隱せりとして妨げなし。

猛士にして壽なりせば、木戸伊藤山縣等諸公の榮達せるより推し、同く榮達したるべしとし、或は先輩として其上に出てたるべしと爲し得ると同時に、前原富永等の志を得ざりしより考へ、幾許か推察を異にせざる能はず。木戸は長州の代表者として維新の三傑に列し、大業と共に不朽なるべきも、晩年怏々として樂まず、某が己れを棄てゝ大久保に就けりとて、交友の賴み難きを歎じぬ。壽なるとも、能く廟堂に好地位を占めたるか、又は某を招取するに堪へず、さりとて之が下に居るを欲せず、前來の行路を變ずるの已むを得ざりし無きか、疑の存するあり。公は性敦厚にして明哲保身と目せられしも、猶ほ時に不平の禁じ難かりしとせば、更に一層多感にして敢爲勇往なるの能く平穩に過ごすべきやを保し難たし。猛士は順序として木戸以上の位置を占め、廟堂の樞軸を握り、大と無く小と無く經營に任じ、他に能く比肩する無きに至れるを想察し得べきも、事實に現はれし所に據れば、衆と和して安逸を偸むよりも國家の爲めに身を危くするの傾向あるに非ざるか。事を起すも、前原の如くならず、西郷の如くならず、板垣の如くならざるも、而も何等か此に類するあり。或は時の秕政を憤らんか、自由民權に力を致し、立憲政治を今日の狀態と異にせしめたるべく、或は世俗の輕佻を慨したらんか、自由民權の國家に毒するを唱へ、保守黨を糾合するに勉むるが如きこと無しと限らず。其他幾樣にも解すべきが、要するに後半生を假定する場合、何の確むべきを認めず。

人は皆な多少時代の色を帶び、異なれる時代の人と異なれる所あるも、性格に於て、將た境遇に於て、同一模型に入るべき無きに非ず。嘉永以後慶應までの時代は、其間蜚出せし人物と共に他に多く例を求め難く、特に傑出せる猛士の如き、寧ろ獨歩とするの當れるも、此に先ちて必ずしも之に對比すべき人物なしとせず。猛士の以て未見の師と爲しゝ山鹿素行の如き、管に見地に於てのみならず、又た性格に於て大差なきあらん。素行は六十四にて歿し、一生の事略ぼ爲し盡くし、猛士の半途にして逝けると遂ふも、經綸の才を抱き、進みて經綸の任に當らんとし、幾多艱難に屈せず、一難を經る毎に愈ゝ奮へる所、聊か轍を同くす。素行の

時、識も才も此に及ぶ無しと見えしが、其の凡常を拔きし丈け世に容れられざりしとあらん。容れられざりしも、爲すと有るを得ざりしに非ず、常人の成功とするより成功せし觀あれど、常人の滿足する所に滿足せず、更に大に爲すこと有らんとして志を得ざりしのみ。萬石に非ずんば仕へずといひ、浪人の身を以て四五千石の格を保ちしは、封建時代に豪とするに足るべく、而も爲めに當路者に忌まれしこと少からず、遂に轗軻落拓の避くべからざりき。其の非常の識と非常の才とを以て失意に果てしは、熊澤蕃山と相ひ似たり。倜儻奇偉なる永富獨嘯庵は四傑として素行蕃山仁齋徂徠を擧げしが、前二者は不遇に終りしもの、猛士は其の孰れもの年齢の半に達せず、隨て事功に於て此と較べ難きが、強て其の中に列すれば、前二者なりとすべく、即ち不遇に終はるべき數なり。而も素行といひ、蕃山といひ、勢力家の迫害を被り、抱負の幾分一をも伸べ得ざりしかど、時代の經過につれて愈々惜まれ、特に素行は鋒鈍の最も露はれ、德望も厚きを得ざりしに、感化の頗る明白にして、武士道の重ぜられ來りしと伴ひ、此と離るべからざる關係を有し、近年に及びて名聲愈々高かし。猛士は豪快に於て素行に若かざるも、至誠國に盡すに於て之に優るべく、其の一世を眩耀すること素行の如くならざりしは此に在り、後人をして同情を催さしむること素行の上に在るも亦た此に在り。

支那歷代、此類の人を求め得ざるに非ざるも、時代の遠くして引例するに適切なるの少く、近時多少の動搖ある、中に其人有るべしと思はるれど、未だ特に耳に觸れしあらず。歐洲の我と國情を異にするは一般に認めらゝも、往々名を異にして實を同くするあり。尊王攘夷や、佐幕開港や、彼に之れ無きに似たれど、形勢を同くするを認むるに難からず。愛國者といひ、革命家といふは、我に在りて即ち當年の志士たり。ホーフエルがチロルを佛國の羈絆より脫せしめんとせしが如き、マジニー、ガリバルヂーが伊半島統一を圖りしが如き、延いてオーコンネル、パーネルが愛蘭の爲めに盡力せしが如き、皆な我が志士傳中に入るべき性質のものなり。唱へて後に自ら局に當るあり、或は身を終ふるまで唱へて已まざるあり、元と勢に依り、又た人に依りて違ふが、マジニーは一身を革命に供し、革命を措いて他に何等念慮に上れる無かりき。彼れ官を欲せば得られざりしに非ず、財を欲せば得られざりしに非ず、屢〻其の機會の到來せしも、之を捉へんとせずして、却て革命の機會を捉

ふるに汲々たり。不平の爲めなるかといふに、固より不平の爲めなれど、其の不平は一身の位置よりせず、國家の爲め人類の爲めを思ひての事なり。爲めに親友と交りを絶ち、形影相ひ弔ふに至るを辭せず、平穏を欲する者より觀れば、誠に厄介至極にして、其の計報の傳はるや、各國の官僚相ひ慶して安んぜり。有爲の資を以て斯くの如く一生を變亂の爲めに費すは、世に稀れなりとすべきも、爵祿の爲めに不平ならず、絶えず或る理想を描いて不平なる者あるを忘るべからず。我國に此の如き者なきも、維新の三傑を以て伊太利建國の三傑に比する際、木戸を以てマジニーに對するの常にして、性格の異なるの言ふ迄もなきも、而も公の不平は尋常に非ざりき、或は爾後愈々增したらんも測るべからず。猛士に至りては、渾身唯だ忠誠なるも、熱情の迸りて緩慢なる變遷を待つに堪へざるべきやにも察せらる。幕府を破壞して王政の興復に努むるも、後ち議の同僚と協はず、畫策に次ぐに畫策を以てするが如きあらば、或る點に於てマジニーと併せ視るべき無しとせず。而もマジニーの友と絶つに反し、頗る友情に篤く、友と終始する跡あるを觀れば、經歷の大に異なるべきをも考へ得ざるに非ず。猛士の事は他に例なきが如くして之れ有り、例あるが如くして之れ無し、其の假定せられたる後半生は永く疑問に屬す。

猛士の知らるゝは一半にして他の一半は長へに知るべからず、唯だ僅に想像を以て補ふべく、而して其の想像は人々全く一致を缺き、隨て畢竟如何なる人物なるやは終に決定し得ざるべきが、既に知られし事實を以てせば、性格といひ、見識といひ、才幹といひ、常人の上に出ること遠く、何程か品川子の面目を具へ、而して幾割か之が輪廓を大にし、政治に從事して良政治家と爲り、教育に從事して良教育家と爲り、操觚に從事して良操觚家と爲りたらんと見ゆ。德を立つるに適し、功を立つるに適し、言を立つるに適し、滔々たる者の一に偏し而も得ること能はず、得るも甚だ不充分なると同日に語るべからず、而も最も何に適し、其の適せる所に於て如何に顯はれたるべきやは、之を決定し易からず。今日人の欽慕して已まざるは、其の大志を抱きて空しく斃れしを惜むならんも、言はずして性格の高きに一致するものゝ如し。言はずして一致するが如きに妙あり、嗚呼眞相は批評を超越する所に存するか。（明治四十一年十月十八日）

井伊直弼と岩倉、大久保、森、星

井伊直弼銅像除幕式の期日は端なく一問題と爲れり。一方は彦根藩の關係者一方は水戸藩及び長藩の關係者、幹部と爲りて相ひ爭ひ、雙方多くの野次馬の附き從ひつゝあり。當時の謂ゆる志士にて現に生存するもの少からず、或は事の昨日の如くなるを感ずべく、之に望むに冷靜の判斷を以てするは尙ほ早きに失せん。野次馬連は事實を知らず、歷史に通ぜず、一知半解徒らに喧囂するに止まる。櫻田門外血染櫻を吟ずる者は、直弼を斥け、開港五十年を祝する者は、直弼の先見を稱して已まず。世に薩長を憎むもの多く、其の多きと共に直弼に同情する聲の廣く聞ゆれど、人物の如何は聲の大小にて決すべくも無し。直弼は果してマコトレー及びカーライルに依りて稱贊せられしクロムウエルの如くなるや否や、聊か疑を免れず。直弼が櫻田に要擊せられてより十五年後、岩倉具視喰違に要擊せられ、四年後、大久保利通紀尾井町に要擊せられ、十一年後、森有禮官邸に要擊せられ、十二年後、星亨市會議事堂に要擊せられたり。元と殺人は珍らしからず、大官として大村廣澤等も殺されしかど、此等は要するに暗殺に過ぎず。歐米を通じ、無政府黨員の暴行あるも、大抵殺王狂の名の下に包括すべきものに係る。趣意を箇條書きにし、之を法廷に訴へ、或は之を世間に訴ふるは、單に私情よりせず、幾許か國家に對する見地よりせる者にして、要擊者の疑問たると同時、被要擊者も亦た疑問たるを失はず。公然要擊せられし者、五十年間、井伊を併せて都合五人、相ひ對照し來れば何の斷案をか得る。

毀譽褒貶の甚だしき者に偉人あれど、其の甚だしきを以て必ずしも偉人と爲すべからず、毀譽褒貶の爭はるゝ、其の人格の爲めならず、其の位置の爲めなると、往々之れ有り。井伊直弼が諸侯の列に在りて比較的膽力及び才幹に長ぜし事、大名と應接し且つ之が黜陟を敢てせし跡に徵して知るべく、確に凡庸に非ざりしを認むるに足る。而も大名小名安本丹といふ世の中、其間に傑出せしとて何程の能力ありとすべき。開港鎖港に關し何の定見ありしやは今に於て尙ほ疑はるに非ずや。開港斷行の當時、偶〻最も責任ある大老職に當り居りしを以て姑らく先見の明を許すとせんも、之に伴へる政策に於て多く稱すべきを見ざるを奈何せん。久しく

鎖港して突然開港せば、國内の動搖すること豫め必すべし、況んや二百八十藩各〻多少獨立の形を具ふる、能く平穩無事を期せんこと極めて難たし、大老は必ず之に應ずるの處置なかるべからず、即ち吾が藩兵を練るは勿論、譜代親藩を糾合し、以て外樣大小名に臨まざるべからず。然るに直弼は空前の大事を決行しながら、殆ど全く實力の準備を忘れたる、其の屢〻大獄を起しゝの何を恃みての事なるか、寧ろ怪訝に勝へたるあり。水戸越前と爭ふなど、唯だ益〻内訌を醸すのみ。彦根三十五萬石、若し兵を練るの宜しきを得ば、幕兵の中堅と爲し得たらんに、實際其の準備ありしや否や。七十人の供を連れ、僅に四分一なる十八人に要擊され、散々に破られしが如き、たとへ不意の出來事とはいへ、平素の心得の足らざるを示ししに非ずや。若し心得のありたらんには、前後左右を指揮し、立ろに要擊者を斬り攘ひ得たるべき筈。刀を帶びつゝ之を拔かんとして得ず、進退度を失ひし狼狽加減、到底率ゐて以て鐵血政策を行ひ得べくも見えず。直弼の威權を揮ひしは、徒らに威權を揮ひしもの、國政の上より特に稱すべき無きにあらずや。膽力あり、才幹あるも、彼の如く不準備にして何ぞ大事を成すに堪へん。

井伊、岩倉、大久保、森、星の五人は、性格に於て互に相ひ同からず、容貌の異なるよりも異なりとすべきが、幽かながら一點共通の認むべき無きに非ず。即ち孰れも非行を敢てして威福を弄すと解せられ、少くとも爾かく誤解せられたり。其の心事に立ち入れば頗る諒とすべけれど、兎もかく誤解を招くの形跡ありしを爭ふべからず。人相見が劍難の相ありとする所なるべし。中に就て岩倉具視は要擊せられて之が爲めに死せず、他と少しく異なるものあり。要擊者の卑怯なる、五人連れにて暗夜に乘ぜしなるが、而も要擊の趣意は稍〻明白なるを失はず。岩倉は憎怨を恐れず、復仇を恐れず、是認せし所を斷行し、要擊の目的物と爲ること直弼と大差なく、直弼の要擊せられしが如く要擊せられたりとすべし。されど直弼よりも智略あり、事に臨みて宜しきを制するを得べく、若し安政年間大老と爲りしならば、均しく開港の方針を採るとも、徒らに開爭を事とせず、徐ろに幕府の實力を養ふに務めたるべし。開爭の避くべきに非ずして、時に水戸越前等と衝突するも、之に先ちて味方の諸藩を纏め、一たび爭ふや他をして反抗の術なきに苦ましめたらん。加ふるに己れ自ら表面に立たず、德望ある者を戴き、或は德望ある者を次位に置き、其

の蔭に隠れて畫策に從事すべく、一部人士の怨を買ふも、幕政をして漸次緒に就かしむべし。事は一人の力に成らざるも、岩倉は直弼の位置に在りて直弼よりも功を收めしに相違なし。直弼は岩倉に比し堂々たるらしきも、應接の態度を外にし、殆と總てに於て劣れり。

岩倉を要擊して果さゞりしは、時の壯士の憤慨する所なりき、曰く、土州人は外剛にして内柔、大臣を要擊するに暗夜を以てし、密かに自ら遁るゝの意あり、卑怯も甚しと。加州人が大久保を要擊したる、種々の事情あれど、一部分斯くして手並を示さんと欲しゝなり。一人馬足を斬り、餘は直ちに馬車に迫り、而して打ち揃ひて自訴せる、皆な手筈を整へ置きしもの、手筈の整ひし所に陷れるは、實に大久保の不運なりとす。されど一人の護衛あるに非ず、要擊せらるゝや、靜かに書類を函に納め、車窓を開きて出でし所、直弼の多くの護衛を擁しながら輿中に殺されしと同日の談にあらず。大久保は必ずしも見識に富まず、對外政策に關し何程の智慮ありしを斷言し難く、大老として直弼と同じく岩瀬等の知識を藉らざる能はざるも、内政を處するに於て幾層か巧みを加へたるべし。將來形勢の如何に移るべきかを測り得ざるも、開港と決せば國事は何の狀、鎖港と決せば國事は何の狀なるを察し、着々政務を執るべく、政敵の少からざるにせよ、周圍の人をして信頼せしめ、列藩の多くをして歸する所を知らしむべし。政治家として直弼に優ること一二段のみならず。其の横死は眞に悼むべしと爲す。されど充分に政治家としての資格を備へたるかと問はるれば、然りと答ふるを得ず。充分に備へたらんには、何ぞ薩南暴徒の起るが如きあらんや。内亂の爲めに國帑を消磨し、剩へ維新の元勳に賊名を負はせ、同郷友人をして悲慘の最後を遂げしめたる、たとへ勢の禦ぐ可らずして却て鎮壓の功の大に稱すべきも、一時なりとも自ら責を引いて退くの當然ならずや。然るに功を以て位階を進められ、更に益々爲すことあらんとせるは、忠亮の念の嘉みすべきにせよ、盈尺の誠に觸れずとせず。而も大業の完成を三期に分ち、最初十年を以て維新の緒に就ける、次いで整理に着手し、更に發展に及ばんとせる、直弼の企て及ばざる所なるべし。

森有禮は大政に與からず、與りしも閣員の一人としての事、主とするは文教に限られたり。櫛臣を殺し、國政を變ぜんといふ壯士の趣意に吻合せざるも、異を好み、

奇を衒ひ、大事を誤るかに疑はれぬ。されど大政の衝に當らざる丈け、要擊する者も幾許か直弼等と違はざる能はず。徒黨を組みて途に要するよりは、單身邸に入り、而も刀を以てせず庖丁を以てせんとせり。事を誤解すること甚しく、森に取りて誠に氣の毒の事なりしかど、誤解も空しく起らず、幾分か人をして身命を拋たしむべき誘因なかりしに非ず。己れの信ずる所を執りて動かず、攻擊の百出を厭はざるは、豪とするに足るも、事體の大小を識別するに長ぜず、動もすれば事の末に拘泥し、大事の如く決行せんとせる、常人より觀て頗る異樣に感ぜられし無きにあらず。大政に當りて如何なるべきやの判明せず、全く當り得ざるに非ざるも、適任なりと謂ひ難たし。直弼に較べて見識は確に之れ有り、國情の紛々たる際、時局を察するを難んせず。恐らく自ら開港を是認し、人をして之を是認せしむるに務めたらんが、物議を釀すこと直弼に過ぎたらんも知るべからず。場合に依り鎖港に傾き、之を斷行せざるを保證する能はず。案外注意深くして妄りに無謀の擧に出でざるも、大政を處するに於て直弼と孰れか優るを決せんは容易にあらず。自ら人を見るの明ありとし、屢ゝ拔擢せしことあれど、眞に有用の材たりしは寧ろ稀れなりき。直弼も人を知るの明ありしと爲すべからず。二人は相ひ似たる所少く、之を比較するの無理なれど、共に大政に當るの適材ならざりしとせん。

星亨は森と同く一人の兇刃にて斃れしが、大臣として殺されず、政界の惑亂者として殺されしなり。曾て大臣たりしも、横死の當時大臣たりしに非ず、大臣たらざるも、大臣の上に出て、時として首相をも動かし、勢力を張ること近來稀れに見る所なりしとす。林董の曰ふやう、大久保以後、唯だ星一人のみと。蓋し自ら信ずる所を行ひ、而して能く勢力を張り得たるに於て相ひ類せりとするなるが、星をして直弼の位置に在らしむれば何狀なりとする。見識に於て、手腕に於て、直弼に優るや明けし。國是を決定し、列侯を操縱する、或は大久保に優るべく、直弼に優ること遠かるべし。彼は明治年間よりも安政年間に活動すべかりし者、之に先ちて生れざりしを憾まざる能はず。國是を決定して宜しきを得るや、列侯を操縱して宜しきを得るや、事頗る疑はしく、或は誤れるの甚だしからんも、直弼の敢てせしに劣るべくもあらず。權を貪り、財を貪り、到らざるなきも、明治に入りてこそ大なる弊害を及ぼしたれ、非常の時に於て非常の功を立つるに利なしとせず。權を貪るは國政

の統一に益し、集めし財を散らすは運動を敏活にするに益すべし。星をして直弼の位置に居らざらしめしは、彼が爲めに眞に不幸なりしなり。直弼も明治年間に居らば、堀田岡部等の位置を占むるに堪へん。星は明治年間に在りて唯だ政界を腐敗せしむるに終り、直弼は安政年間に在りて幕府の運命を縮むるに終り、晉に國家に貢獻し得ざりしのみならず、自らの破滅を招きて已みにき。

世には要擊せられしのみにて名を歴史に印せし者あり。吉良義央の如き、若し要擊せられざらんには、今日一人の記憶せざるべし、單に名を遺すを幸なりとせば、義央なる者は赤穂の遺臣に惠まれしなり。井伊直弼は此類の比にあらず、總てに於て輪廓の大を加へたるも、後人に記憶せられ居るほどの價値あるやは疑はし。其の大老職も技倆を以て贏ち得たりしに非ず、家柄を以て然りしのみ。職に在ること僅に二年、内外多事にして衆の耳目を集めしかど、畢竟幾許の能力あり、幾許の功績ありしや、判定し易からず。横濱開港の元勳として尊崇するなど誠に凡俗の見の甚だしきものなり。世間の多數は凡俗者流にして、凡俗の見の行はるゝの怪むべきなく、直弼を目して豪傑なり英雄なり國家の功臣なりとして稱贊する者あらば、其の爲すがまゝに任かせて差支なきも、而も事實を事實とせんと欲する以上、さる俗見に拘るは餘りに淺薄といふべし。性格及び能力に於て岩倉、大久保、森、星の上に出てず、寧ろ其下に降り、或は大に降るべし。要擊せられし者を擧ぐれば、尚ほ板垣、大隈の在るあれど、生存するは茲に言ひ及ばず。（明治四十二年七月十五日）

北條時賴母

嘉賊興家九世存。不知何術導兒孫。
婆心苦以赫針手。補綴破窓天下温。

靖國神社と銅像

靖國神社は明治元年五月十日の布告を以て『癸丑以來唱義精忠天下に魁して國事に斃れ候諸士及草莽有志之輩』及び『當春伏見戰爭以來引續東征各地の討伐に於て忠奮戰死候者』の爲に京都東山に祠宇を設けられしに始まり、後ち大小各戰役の戰死者及び準戰死者を合祀し、今回新たに戰死者三萬餘の合祀を仰出されたる次第にして、要するに皆な國難に斃れしと看做すべき者なり。癸丑以來の殉難者は或る意味に於て多く國事犯罪者にして、稱揚せし者もあれば疾視せし者もあり、佐賀亂の如き、鹿兒島亂の如きも、孰れ皆な勝者と敗者と感情正に相ひ反すべく、之を擧國一致の下に於てする外征の戰死者と同列にするは稍ゝ類別に疑なきを得ざれど、殉難死節の點に等差なしとして妨げなからん。但だ內亂には己れの事ふる所己れの是とする所に殉難死節し、而して永く祭られざる者の存するをも記憶せんことを要す。

最初の布告に『大政御一新の折柄賞罰を正し節義を表し天下之人心を興起被遊度旣に豐太閤楠中將之精忠英邁御追賞被仰出候』とて、天然の壽命を以て終りし豐太閤をも引例しあれど、從來合祀せられたるは盡く君國の爲に非命の死を遂げしに限り、如何に功勞の大なるも如何に心術の正しきも、苟も非命の死を遂げずんば茲に祭られずと定まれるが如し。乃ち靖國神社は國家に大功ある者を表彰するよりも、國家の爲めに斃れし者を祭る處にして、固より英國のウエストミンスタ！アベーの類と性質を同じくする者にあらず。靖國神社に合祀せらるゝは貴賤上下の差別なく、大臣大將と雖も國難に斃れざれば與かるを得ず、一輸卒と雖も死せば則ち與かる。是れ我が日本特別の祠堂にして、平民主義を標榜し階級に拘らずと稱する國に於ても遽かに企て及ばざる所なるが、此の微妙なる趣旨と聊か相ひ容れざるかの恐れあるは、即ち境內及び附近に建設せられし功臣の銅像にあらずや。

大村兵部大輔の銅像の靖國神社境內に建設せられし理由は、願書に『同氏儀維新之際國事に盡力功績不尠且つ招魂社設置之初に當り地所選定社宇計畫等に與り候緣由も有之候に付特別之御詮儀を以て御許可被成下度』とあるを以て知るべし。

大村氏は維新の際參謀總長とも云ふべき位置に在りて軍事の爲めに盡くしゝ所甚だ大、且つ刺客の刃に罹りて横死せしも、殉難死節とせんは未だし、合祀せられずして而も合祀以上の優遇と見ゆるに及べるは神社創設に力ありといふに存するが、斯の如きは果して事體の當を得たりとすべきか。既に合祀せられざる者にして銅像を建設せられし先例あり、二十七八年役に大功あり、現戰役にも少からざる關係ある川上子の銅像の田安門に立てられたるは固より其の處なるも、靖國神社の實體より考へて、少しく異とすべきを覺えざるか。

或は曰ふ、神社と境内とは自ら別物、伊藤侯の銅像が湊川神社境内に建設せられしとて、楠公の神社に何の累を及ぼさず、大村氏の銅像が競馬場に立てられしとて、靖國神社は依然として殉難死節者の神社たるを失はず、況や川上子の銅像は全く境の外に在るをやと。然り、説者の言の如し、而も楠公の事功は全國民普く知る所、伊藤侯の聲名も之に對し毫末も輕重するに足らず、之に反し靖國神社に合祀せられし靈名は廣く世に知られたる少く、大村氏の銅像あり川上氏の銅像あれば、或は神社を代表する者にあらざるなきやを疑はしむ。若し二人にして合祀せられあらんには此の如きも尚ほ可なりとせんも、凱旋の壯觀を觀、戰後の光榮に浴せし者にして殉難死節者の上に立つは、動もすれば一將功成りて萬骨枯るゝの嘆を招く所以の者ならずとせず。功勞を表彰するには別に適當の場所を擇ぶべく、バンテオンを建設するが如きも頗る妙なりと雖も、而も靖國神社にして國難に斃れし者を祭るべき所たる以上、成るべく其の趣旨を堙沒せざるやう有りたきものならずや。（明治三十八年五月五日）

小楠公母

櫻井函嗚魂欷歔。抱兒慷慨向南朝。
誰知當日千行淚。流爲香楠護樹前。

倫敦タイムスの偉人觀

倫敦タイムスは世界に於ける重なる人物の歿する毎に其の評傳を掲げ、其の集まるや輯して刊行し、千八百七十年より九十三年まで積んで五冊を成し、中に收むる所總べて百四十五人、内、政治法律五十八人、奈破崙三世、ヴヰクトル・エマヌエル、歴山二世、維廉一世、グレヴヰー、ガーフヰルド、ビーコンスフヰルド、ガムベッタ、ゴルチャコフ、ブライト等あり。軍事十人、パゼーヌ、ナピール、モルトケ等あり。宗教十八人、ニューマン、マンニング、スパルジエオン等あり。文學二十七人、ヂッケンス、ヂョルヂ・エリオット、カーライル、ルナン、ユーゴー等あり。理工學二十餘人、ヘルシエル、ダルウヰン等あり。他に孰れにも入れ難たき者あり、又た二三に跨れる者あり、政法軍事に跨りてエスパルテロー、ガリバルヂー、ブーランゼー等あり、グラントは軍人なるも、大統領として政治に跨れりといふべく、ゴルドンの如きは、軍事宗教に跨れるなり。政法と文學とに跨れるに至りては頗る多く、ギゾー、チエールを始めリットンの如きも亦た然り、フォーセットは少しく趣を異にするも、幾許か此の二つに跨れり、ヘンリーメーンも同じく然り、マジニーも強ひて分類すれば亦た此邊に在らん。全然別なるは猶太人モンテフヰオールなりとす。充分に分類し得ざるも、大體此の如し。

タイムスの評傳し蒐輯せし偉人傳中には英國人最も多きを占め、外國人の載るべくして載らざりし者少からず。元と英國の新聞なるが故に、自然に英國を中心とするの避くべからざるべけれど、一層公平に世界の上に眼を注がば、更に宜かるべし。本國人の好尚よりして須らく載すべきの人を載せざる不公平を生ぜしは美術に在り、美術家として擧げしは唯だ一の畫伯ランドシーヤあるのみ、英國に大なる美術家の少きは、其の偏へに摯實を崇びて大陸の如く美術に重きを置かざるに因らんが、美術家としてランドシーヤを擧ぐるならば、是非共畫家として佛國のミレー、コロー、ドービニを擧ぐるを要し、又た音樂家として獨逸のリスト、ワグナルを擧ぐるを要す。是れ皆な世界に顯著なる者なりしに、全く之れを擧げざりしは不思議の沙汰とす。英國は果して永く繪畫に於て佛國に劣り音樂に於て獨國に劣るの覺悟なるやは疑はしく、得べくんば之と拮抗し之を凌駕せんことを念ふも、

勢ひ之を得ざるが爲めに自ら重きを此に置かざるに非ざるか。而も是れ英國の短とする所なるが故に重きを置かざるものとすべきが、此より更に奇とすべきは、擧ぐる所の一百四十五人中、一人の謂ゆる富豪なる者、謂ゆる實業家なる者を混ぜざることなり。英國は大陸に比して多くの富豪を有し、多くの實業家を有するに一人の富豪及び實業家を擧ぐるなかりしは、偶〻英國人の思想の剛健なるを見るに足らずや。

人の社會に立ちて事を成し、而して社會の此に感謝の意を表するは、其の成す所の事業の幾許か社會に裨益するあるを以てなり。人に採るべきは事業に在り、金錢に在らず、巨億の富を積むとも、たゞ銀行に預けて利殖を計り若くは土地を有して地代を收むるに止まらば、由りて如何に自ら奉ずること豪奢、延いて家族及び關係人をして贅澤を衆人の前に誇らしむるも、社會に對して寸毫の裨益する所なし斯かる守錢奴は生くるも死するも社會に少しの關係なし、隨ひて死するとも全く放棄して顧みられず、一篇の弔辭さへ捧ぐるものあらず。之に反し家に餘財なきの人といへども、事業の上に於て多少世に裨益する所あらんか、世は必ず其人に對して感謝の意を表すべく、其の逝くや則ち痛切なる弔辭を捧けんとせん。タイムスの擧げし百四十五人は概して偉人とすべきが、中には特に偉人とするに足らざるものあり、然るに之を擧げて而して一の富豪一の實業家に及ばざるは、實に此邊に見る所あるに非ずや。若し富豪若くは實業家にして身死して世に弔はれんと欲せば、必ずや己れ自から進みて何等か世益に寄與せざるべからず。或る事業を興して　會に多少の利益を與ふるある、則ち其の功勞の故を以て世に　彰し、死して弔辭を受けんも、己れ世益に關すること無く、他の事業を興して稍〻利益あるを見て取り、大金を投じて此と同一の事業を興し、依りて他を壓倒して獨り自ら利益を壟斷する者の如き、其の能く一握して巨萬の利を占むるは、金を得るといふ點に於て能ありとすべきも、斯かる徒は社會に有るも益なく、無きも損なし。

我國には富豪といひ、實業家といふ習はしあり、富みたる者は之を富人といへば可、何ぞ故らに富豪と呼ぶを要せん、寧ろミリオネールの如く百萬圓家といひ千萬圓家といふの適せるに若かず。實業家に至りても、實の字を附するは無用の事たり、ビジネスは業務の義、外に實なる意義を有するに非ず、然るに故らに實の字を附

けて之を呼ぶ、元と無用の事たり。金を崇ぶは文明國の風なりと過信し、一意金錢の蓄積に勉むる者あるが、金錢を蓄積するは特に其人なくとも能くすべし、千萬圓の金を蓄積せんとせば、銀行をして集めしめて妨げなし。人として爲すべきは金を蓄積するの事ならず、金を以て如何に世に處すべきかゝ要點たり、宜しく金を重んずることを止めて事業を重んずるの風を養ふべし。世界に於て金を重んずる者は支那人なり、歐米人の金を重んずること洵に此に讓らざるも、事業を興す念の金を重んずるの念に勝つ者多し、是れ即ち其國の益ゝ進歩し益ゝ隆盛に向ふ所以なり。啻に國家のみ然るに非ず、個人としても亦た同じく、金よりも更に事業を重んずる間、其の人の益ゝ進歩するを期すべきも、事業よりも更に金を重んずるに至りては、既に其の人の終りに近けりとすべし、孔子の血氣衰ふる之を戒むる得に在りと言へるは即ち是れなり。英國の富豪多きに拘らず、タイムスの死者を評傳する、此を措いて顧みざるは由る所なしとせんや。

帝王は著るしき働きの見るべき無くとも、世人の注意を惹くの大なる丈けに擧ぐる所も亦た多し、而も世人の注意を惹くの大なる帝王に就てさへ、必ず何等か事業の見るべきあるを擧げ、單に帝王なるが故に擧ぐるにあらず、皇族として奈破崙親王を擧げたるも是に因る、若し唯だ皇族なるが故に擧ぐべしとせば、其の數頗る多かりしならん。要するにタームスの偉人觀は多少偏する所あるも、大體に於て剛健の跡ありと稱すべし。

〔無名も可〕

倫敦タイムスの評傳に載れるは謂ゆる世界的人物なり、洋の東西を問はざるより推せば、今後我が國人中にも死して評傳を紙上に載せらるゝの少からざらん、現に兒玉大將は其の中に入れり、伊藤山縣大山東鄕等の諸公亦た皆な然らん。

謂ゆる世界的人物とは要するに此の如き人物を指す。此等の人々は皆な多少傑出せる力を有し、常人の能く企て及ばざる所なるも、世界的人物たると然らざるとは特に重きを置くべきにあらず。國内に在りて眞に超群絶倫の器ならずして而も嘖々として世評に上るの少からざるが如く、世界にも亦た此類あり。夫の百四十五人は倫敦タイムスが一世の偉人として評傳を掲けし所なるも、中に就て眞

に世界的として目すべきは多からず、名のみを聞きて其の何者たるやの知られざるも少からず、而して聲名藉甚、遠く世界に聞えし者にして實は特に賞贊を値ひせざる、亦た之れ有り、ブーランゼーの如き、一時世界を噪がしゝかど、元と虚名の僞英雄にして、何等稱すべきあらず。ドレイフユスも亦た勝ぐれたる偉能あるに非ずして、廣く世界に知らる。

老西郷は我國に於て近世第一の人として稱せられ、確にガリバルヂー以上の人物たるに、世界に在りて之れを知る者極めて稀れなり、向後日本の益〻世界に知らるゝと共に此人も亦た知らるゝに至らんが、今日に在りては毫も海外に顯はれず。大久保も老西郷に亞ぎての人物なるに、其名廣く知られず、近頃モーリス氏の著はしゝ「日本建國史」中に大久保一翁と混同せられ、子爵として記されたり。則ち老西郷や大久保や、爾かく世に知られざるも、知られざるの故を以て偉人物たるに累する無し。

國内に在りても名の廣く國人に知らるゝ所よりせば、岩見重太郎の如き、平井權八の如き實に何人の上にも出づ。單に名を知らるゝの偉ならば、岩谷松平の赤馬にて自から廣告せしを偉とすべし、されど斯かる評判を念頭に置きて或は偉なりとし或は否らずとするは、偶〻其の人物の小なるを表はすのみ、最も力ある者は往々にして最も知られざるに終る。日蓮は法華宗徒の崇拜する所にして國内に大なる聲名を荷ふ、而も原坦山は新井日薩を評して日蓮よりも偉なりと言へり、評や必ずしも當れりとせざれど、亦た多少見る所なしとせんや。たゞ世上評判の盛しきと否とに據りて人物の大小を說くは、凡俗中の凡俗たりと謂ふべし。

勾　内　侍　　天女開雲下九門。
慰勞何必位兼官。　少時取樂亦君恩。
唯是平生期一死。

人物の段階

人物の評價は容易に定まらず、人々各〻觀る所を異にす。目くら千人目あき千人といへど、難問題に對し盲者の數遙に多く、衆盲の象を評すといふの當たれり。毀譽褒貶の信じ難きは何の世も然り、喧々として賞贊さるゝの案外に凡庸にして、俊傑の却て聞えざるの稀れならず。實に世評の紛々は何等重きを置くべからざるも、而も幾世代に彌りて通觀せば、其間多少眞に近きもの無からず。歴史的人物とても多く疑ふべく、以て直ちに事理を推斷し得ざるも、概括して稽ふれば後代に傳はれる事蹟が其人の偶然性に係れば其れ丈け輕んぜられ、必然性に係れば其れ丈け重んぜらるとせん。

世間の多數は多少名聞を好み、何がな之が爲めに工夫する所あるが、邸宅を大にするが如き、其の最も普通なるものゝ一なり。門を大にし、玄關を大にし、庭園を大にするは、自らの豪的なるを表示する者にして、其前を通行する人亦た觀て尋常人の家にあらざるを想ふ、家を壯大にすること路傍人の尊敬心を惹き起すに少からざる効力あり。されど住宅は何處迄も持主に附屬して之と共に移動すべき者なるのみにて、彼れが住宅を知らざらず、持主にして旅程に上れば六尺の身を提ぐるのみにて、彼れが住宅を知らざる者は、目前の彼れを視て其の價値を判定し、復た他の住宅に驚きしが如くならず。地方富豪の田舍漢てふ名詞の下に嘲笑せらるゝも是を以てなり。彼等は都下に類少き大屋に住み、周圍の人々に羨まれ居れど、携帶して廣く衆に示すこと能はず、聲譽一地方を出でざるのみ。都下に金殿玉樓を有する人も亦た大同小異にして、尊敬せらるゝの多くとも、百萬の衆に限らる。蓋し家と人とは永く相ひ離るべからざる關係のものにあらず、同一の家にして幾度も主人を易へ、同一の人にして幾度も住宅を易ふるは寧ろ普通の事なり。名園の荒廢して丘墟と爲り、曾て何人の遊びしかの知れざるもの擧けて計へられず、皆な人に於て偶然的たるなり。

住宅は爾く其人に附隨せざるも、衣服は到る處に伴ひ、千金萬金を投じて購へる所のもの之を千里萬里に致すべし。數百カラットの金剛石は千萬圓乃至一億圓を値ひし、之を佩びて旅行すれば、觀るもの皆な喫驚し、旅館の主人は平身低頭して仰ぎ見ること能はず。而も其の着くる所の衣服寶石は必ず其人に伴ふと爲すべ

からず、時として脱することあり、時として奪はるゝことあり。世界有數の大金剛石にして幾回か所有主を易へしものあるが、唯だ有數の寶石と稱せらるゝのみにて、何人の所有せしやは深く問はれず。身に着くる所は元と偶然的にして、之を着けて敬はるゝは身の敬はるゝに非ずして、物の敬はるゝなり。特に百金千金の價あるを着くるが如き、何處にも之れ有り、以て誇りとするに足らず、他も亦た之に着目すること無し。偶然的なるは、其人に在りて之れ有るも可、之れ無きも不可なし、以て衆に誇るの徒は、一旦之を離れて其の誇るべきを失ふこと、恰も驢馬の獅皮を被むりて衆獸を驚かし、獅皮を被むれることの發覺して頓に侮蔑せられたると同じ、棺に入らずして既に全く忘れらるゝは自然の數のみ。

財多き者は殆ど往く處として意の如くならざる無く、謂ゆる多錢善く賈ふの事實なるを認むべきも、財多くして意のまゝにし、而して一朝之を失ひて路頭に迷へるも少からず。之を失はずとも、何時失ふべきかの測られざるもの、斯かる果敢なきものを蓄積して幾億に及ぶも、唯だ其の儘に經過するに於て何の稱すべきを見ず。ロックフェラーは二十億圓の富と稱し、世界に冠たるべきも、後世ルーズヴェルトと同格に推重せらるゝやの疑はしく、或は降ること數層ならんも量り難たし。

官位の高き者も往く處に歡待され、頤にて人を使ひ得んも、これ亦た常に恃むべからざるもの、免官と共に昨の諂佞者をして今の讒謗者と爲らしむるの多し、果敢なきものは至高の地位に達するも知るべきのみ。弓削道鏡は最初の太政大臣たれど、其の故を以て貴しと思はれず、爾後太政大臣の幾十を以て計へらるゝも、記憶すべきもの幾人もなし。歴史上何人が如何なる官位を占めしやを穿鑿するは煩はしくして厭ふべきを覺ゆ。一時の假裝は有りとも無くとも人の眞價に損益する所あらず。爲朝が藏人を受けず、吾れは鎮西八郎にて可なりと言ひしは、實に世態の眞相を看取せしなり。偶然的なるは偶然に來り、偶然に去る、早く忘れらるゝは事の然るべき所とす。

身體の筋骨は此と違ひ、生まれながらにして附隨し、除かんと欲して得ず、決して偶然的ならず。體格の偉大にして腕力の强かりしか爲に傳はれるは二三のみにあらず。安倍貞任の魁梧、谷風梶之助の巨幹は、後人の傳へて驚異せる所、阪本龍馬は西郷の容貌を評するに貞任の再生を以てせり。希臘の如きは體格の秀でしが

爲めに彫刻せられ、美術の名品として知らるゝの多し。容姿の美なるも同じく然り、其人の特有にして、而も行く處人目を惹き、而して後代に傳稱せらる。業平や、小町や、史實は兎もかく、貌を以て畵に文に傳へられ、ハドリアヌス帝の寵童アンチヌースは尼羅河に溺れて神に崇められ、當時作製の像は、今尙ほ、大小の型に模造せらる。かくて身體は人の特有にして、他より如何ともするに由なく、秀てたるは天賦として稱揚すべきも、又た最も變易しやすく、何ほど魁偉なる體格を有するとも、負傷し若くは疾病に罹りて別人の如くなることあり。サムソンの强勇を以てして、一旦頭髮を切られて俄に力を失ひしとかいはる。美人の衰へ易きは譬喩とせらるゝ程にて、五十歲まで容色を持續するもの多しとせず、普通には早く衰へ、中には三十にして凋衰し初むるもあり、況んや天然痘に罹りて痘痕を顏面に印せば、前日の美人は再び視るべからざるをや。身體は必然的なりとするも、偶然的なると多く異なるなし、其の重んぜられながら、大に重んぜられざる、以て推すべし。

精神に屬するは身體に屬するよりも更に必然的なりとすべく、何を欲するとも、何を考ふるとも、外界よりして如何ともするに由なからん。勇氣と智力と、共に特有にして、其人より離すと能はざるが、其の外に現はるゝや、一時性なると久續性なるとあり。毛遂の劍を按じ歷楷して上り、一言にして盟を定めたる、藺相如が虎狼の秦に入り、珠を懷いて頭と共に柱に碎けんとしたる、能く一時性のものを以て功を收めたるなり。張良は此よりも久續的にして、若し博浪沙の一擊にて事を廢せしならば、唯だ力士を僦いて鐵椎を投ぜしといふに止まるも、能く忍耐して時機の到來を待ち、終に仇を復し、統一の業を成し遂げたる、其の久くして愈ゝ徵ありし丈け益ゝ偉なりとすべし。單に勇、單に智なるのみにて功を成し難たく、必ず多少相ひ混せんことを要するが、斯くして功を立てし人々の中に、勇の秀でしもあれば、智の秀でしもあり、而も孰れにせよ、苟も大に超秀せば、世界に表顯し後代に傳稱せらる。古今東西の主なる歷史的人物、即ち歷山大王、該撒より以て奈破崙一世に至るまで皆な是れにして、智勇の發現せる程度に依りて其人の價値則ち定まる。軍人も政治家も然り、文學者も亦た然り。ホメロスは漂浪して終りしも、千古の大詩人として歷山該撒と拮抗するに堪ふべく、或る人は英國をして全印度を失はしむるもシエクスピーヤを失はしむべからずと言へり。シエクスピーヤは劇曲を以て

文明に貢獻し、印象の及ぶ所略ぼ世界に普ねし、ゲーテの如き、ワグネルの如き、亦た漸く此に近似せんとす。

されど勇と智と人に於て必然的なるにせよ、以て功を立つるに境遇の利不利あり。獨自の力を揮ふなきに非ざるも、大抵幾許か多數人の力を假り、多數人に依りて事を成すの跡なしとせず。軍人若くは政治家としての活動は、大は則ち大、異に蓋世の雄を以て目すべきあれと、内情を査察せば、多數人の運動に從ひ、之を代表して顯はるゝに止まり、一個人として何等かの力あるも、多數人と與に俱にせずんば、何の成す所あるを得ざりしならんとも察せらる。國亡び民散りて英傑の名の遺れるの少からざるも、年代と共に漸次湮沒するを免かれず、其の赫々として當世に耀き、尙ほ後代に傳はりながら、動もすれば文人に讓らんとする觀あるは、多數人に依頼せるが故なるべし。東西諸國、各〻英傑として崇拜せらるゝあるも、最も人々の間に傳稱せらるゝの何人なるかを問へば、則ち文人却て軍人及び政治家の上に位すと爲さゞる可らす。司馬遷は史記傳中の豪傑よりも知られ、蘇東坡の赤壁賦は赤壁の戰爭よりも知らる、個人の實力は群集の運動よりも認められたるらし。シエクスピーヤの廣く知らるゝも、單に作物が娯樂の用に供せらるゝが故ならず、一齣一句頭腦より涌き出で、彼あらずんば此あるを得ざるものにて、幾分か時勢に據れるに相違なきも、其の傑出せるは僥倖にあらず、實力に基づけりとして謬らず。音樂に於けるモツアルト、ベートーフエン等の世間的豪傑を凌がんとするも此と同じ、孤立援なく、作る所悉く天才の結晶たればなり。此等は皆な其人ありて始めて其事あるもの、其人あらずんば長へに其事あるを期すべからず。夫の英雄豪傑が多數人の力を藉りて遂げし事功の上に己れの名を冠せると趣を異にす。

文人とても後世に傳はるは僅に一小部分にして、爾餘の多數は概して早く湮沒し去り、生時にも輕侮せらるゝの多き丈け軍豪政豪に劣るに似たれど、大體の傾向は遂に爭ふべからず。されど軍豪にせよ、政豪にせよ、文豪にせよ、事を成すは勇若くは智、否らずんば二者を合はす者にして、其人に在りて必然的なりと爲すべきも、常に其人に附隨すと決定すべからず。勇も智も幼時に之れなく、老時に之れなく、或る一定の年齢間に限られ、其れさへ塲合に依りて異狀あるを免かれず。賞育も其勇を失ひ、良平も其智を失ふとは空語にあらず。勇も智も一生を通じて離れざ

るに非ず、唯だ容貌に比して久續性なりとすべし。眞に必然的なるには一生を通じて附着するを要すべく、然るが如きは獨り性格に於て之を見る。たとへ勇の顯はれずとも、智の顯はれずとも、性格の秀づるの明かなる、則ち最も著るしく必然性の顯はれたるなり。性格は人の生まれてより死に至る一生涯に彌るものにして、以て傑出せるは最も偉大なりとして顯はる。古來多くの英雄豪傑あり、多くの大詩人大發明家あり、能く事功を不朽ならしめしと雖も、其の孰れか孔子、釋迦、耶蘇、ソクラテス等と並び視らる。啻に比肩し得ざるのみならず、遙かなる下位に就くの多し。聖者の史實は種々議すべき無きにあらざるも、人の此に尊ぶ所は、其の勇に在らず、其の智に在らず、實に其人に在り、即ち其の性格を認めたる者にして、そを尊崇するの餘り、或は之を神に比し、或は之を神なりとするに至る。人として離るべからざる性格の最も著るしく顯はれたるならん。人物の眞價は全く此邊に存するなり。

されど此の如きは大體より言へる所、一々に就て討究せば猶ほ疑ふべきの多く、徒らに世評に拘はるは甚だしき不見識たるも、一部分の世評は姑らく措き、久しき間に彌れる各國人士の評言に就て考ふれば幾分據るべき無しとせず。約するに偶然的なるは如何に顯著なるも漸くして消滅し、必然的なるは比較的永く存續し、時として漸次顯彰するあり。

豐太閤夫人
葉席瓦缸長不忘。高臺分坐亦陪傍。
爲君天意厭多寵。免見東耶委寇狂。

淀君
既平濠壘土泥堆。魚鼈失棲生草萊。
却有淀江頻嚙岸。一時陷沒大城來。

猛虎の說

東亞諸國の虎を引きて比喩するの多きは、猶ほ西方諸國の獅子に於けるが如し、東亞に虎を產し、虎を見るの便あるが爲めなり。獅子も時に見ること能はざるに非ざるも、そは極めて稀れ、引きて以て比喩とするほど屢〻ならず。我國にはチャリヂーの持ち來たりしが抑〻の初めにして、在來の牡丹に唐獅子などの畫の毫も眞物と似るあらざる、亦た已むを得ざるに出てぬ。西方諸國は何れの地も獅子を產するに非ざれど、產せざるの地も之を見るに易く、隨ひて獅子を主とするの習はしあり。東亞と西邦と斯く違ふもの〻、前者の虎と後者の獅子と殆んど同一に視られ、比喩に登るの彼此互に同じきもの少からず。伊蘇普物語に現はれたる獅子は東亞に於て虎として現はれ、謂ゆる兩虎相ひ爭ひて獵夫の利に歸する如き即ち其の一。司馬遷の報任安書にいふ、猛虎深山に在る、百獸震ひ恐るゝも、檻穽の中に在るに及びて尾を搖かして食を求む、威約の漸を積めばなり、西伯は伯羑里に拘はれ、李斯は相、五刑を具へられ、淮陰は王、械を陳に受け、彭越張敖は南面して孤と稱するも、獄に繫がれ罪に抵たり、絳侯は諸呂を誅して櫓五伯を傾くるも、淸室に囚はれ、魏其は大將たるも、赭衣を着、三木に關せられ、季布は朱家の鉗奴と爲り、灌夫は辱めを居室に受く、此の人皆な身王侯將相に至り、聲隣國に聞ゆるも、罪至り罔加はるに及びて引決して自ら裁すること能はず塵埃の中に在る、古今一體、安んぞ其の辱とせざるに在らんやと。比喩として頗る切實なりとすべし。

朝鮮の北方今猶ほ虎多く、士人漫りに山中に入るを難んじ、偶〻入らんとする、必ず大に警戒を加へて行く。されど其の一たび捉へられて檻に在り、衆人の觀覽に供せらるゝに及び、誰か此を畏るゝあらん、環視して戲弄し、咆哮せしめて笑ひ興じ、婦人小子亦た喜びて之を觀、相ひ和して共に大に笑ふ。虎たるや全く一なるも、而も勢力の隔絕する此の如く甚だし。而して是れ豈に人事に視るべきに非ずや、資性溫和、群居して他と伍し、敢て先を欲せざる者は苟も安んじて可なるも、自ら豪傑の士を以て居り、若くは豪傑の事を成さんとするの念ある、大に此邊に考ふるあるを要す。同じく倜儻非常の人、然るも居る所の地位已れに便、能く其の猛氣を養ふを得る、時に奮ひ起りて大に叫び、世皆な慴伏して畏憚せざる無きも、一旦據る處を

失ひて他の檻內に歸し、或は制縛せられて力を伸べ得ざる、乃ち如何に大言壯語するも、唯だ惘笑を來たすのみ。范增の項羽に疑はれて憤怒し、天下の事大に定まる、願くは骸骨を賜はりて卒伍に歸せんといへる、豪傑の氣慨以て想ふべし、而も論者は其の去るの早からざりしを憾みて曰ふ、羽の卿子冠軍を殺すに方り、增羽と肩を比して義帝に事ふ、君臣の分未だ定まらず、增の爲めに計る、力能く羽を誅すれば則ち之を誅し、能はずんば則ち之を去る、豈に毅然たる大丈夫にあらずやと。既に羽を誅する能はず、却て之に臣事す、後に追ひて大に怒れりとて少しの効ある無し、たとへ其の人は虎の資にして虎の力を兼ぬるにせよ、既に已に制縛せられて他の命を待つ、大に咆哮するとも、唯だ恐痴に見ゆるに過ぎず。但し爾かく制縛せられしも、猶ほ漢高の爲めに畏れ憚られ、之れ有るが故に楚を重からしめたりき、楚を去りて後、疽背に發して途に死したる、尙ほ人傑たるを完くせり。若し之をして壽にして健、更に漢高に臣事して善く任用されしとする、或は大に用を成しゝも測られざれど、其の世に侮らるゝ一層甚しかりしならん。

虎の虎たるは山野に自由を得るに存す、猛虎一聲山月高、凄壯の情景神に入るとずべきも、而も是れ其の出沒自在、一嘯して風を起すの概あればなり。捉へて檻中に投ぜらるゝ、百聲千聲するも、少しも凄壯を感ぜしめず、煩悶喚叫すとして憐愍を惹くべきのみ。虎の虎たる威力を顯はさんとする、必ず山野に於てせざるべからず、深山に蹲踞し曠野に彷徨するに當りては、極目皆な支配の下に在り、動かんと欲して得ざる莫く、成さんと欲して能はざる莫し、以て滿山を震搖し百獸を慴伏せしむるに堪ふ、故に古來豪傑の束縛を撤せられて大に伸ぶるの機會を得る、人之を目して虎を野に放つ如しといふ。大海人皇子の位を避け剃髮して吉野に隱れしや、時人以て虎を野に放つものと爲せり、此事固と稱すべからざりしも、其の都を離れて身の自由を得たりしこそ、即ち野望を逞うしたる所以なれ。頼朝の平治の亂に敗れて俘囚と爲れる、寔に憐たる可憐兒、死生唯だ平氏の掌裡に在り、池禪尼の百方助命に思めし時、唯だ其の惘むべきを見しに、死を免れて伊豆に流さるゝに及び、人指して虎を野に放つ如しとせり。虎視眈々幾年の間、果して八州の野皆な之に靡く、遂に大に興りて西向嘯呼する、京畿の山河之が爲めに震撼し、水禽の騷げるさへ、猶ほ平氏の軍を潰散せしむるに至れり。太閤薨して諸將互に權を爭ふ、三成は兵

に長ぜざる者、又た人を服するの器量に乏かりし、而も自ら其の後を維持するを以て任と爲し、遂に大に策を畫し家康と雌雄を關ヶ原に決せんとし、一敗地に塗みれて虜と爲り、敵將の面前に引き出されしも屈せず、之を罵りて止まざりし。既に囚はれて猶ほ罵る、唯だ其の窮を見るのみなりしも、彼れが一代の經歷に徴する、之れ有るを以て遽に短とすべからず、彼れや實に豹の傷けられ叫號して死せるものならん。加藤福島は饒勇無比と稱せらる、一たび馬に鞭ちて進前する、向ふ所披靡せざるなく、而して常に忠を豐臣氏に盡くし、嘗て他を以て之に代るの念なく、死生替はらざらんことを誓へり。清正の短刀を懷にして秀頼に屈し京都に赴ける、實に切り死にの覺悟なりし、正則亦た秀忠に勸むるに秀頼を蔑にすべからざるを以てせしが、當時德川氏の眼中既に二人なし、關ヶ原の役よりして疾く之を制耕し、藉りて以て己れが用を爲さしめたり、如何に戰鬪に長せるも、能く爲すこと有るに足らずと知らる、故に天下統一して後ち其の跡脆くも斷絶せり。

維新の際、後藤の將軍に說くに大政奉還を以てせる、風采といひ才略といひ他に挺んでゝ見ゆ、密約して五萬石に封ぜられんとしたる、實に何事を爲すかの測られず、西郷の若き亦頗る之を憚れり。然るに薩長急に兵を一にして幕軍を擊ち、中原の勢爰に決する、彼れ乃ち彼を去りて此に投ず、爾後尙ほ參與とし參議として大に才を働かしたるも、人の之を畏るゝ復た往日の如からず。而も彼は一代の偉材、猗頓の富を作らんとして政界に與からざりしこと十年、尋て突如として崛起し、大同團結を叫びて四方に遊說したる、洵に天下を風靡するの勢あり、云ゆる山東の豪傑並び起り、保安條例を以て如何ともするに由なく、勢の盛んなる伊藤の上に在り、板垣大隈の上に在り、何處まで飛動すべきかと怪まれしに、忽ち轉じて遞信大臣と爲り、自ら分疏すらく、以て內部より改革を計らんとすと。これ强ち口實のみに非ず、幾許か斯る了簡の存せしなるべく、自ら椅子に嚙り附くと稱して機會を窺ひたる、是れ故なり。黑田內閣を破壞して大隈を放逐し、山縣內閣に忍耐して鋒鈍を隱くし、延て松方內閣に至り、議會と衝突して事漸く困難を極め、人皆な局に當るを好まず、推讓して互に相ひ避くるの時、己れ乃ち河野と力を幷はせて內閣を組織せんことを上言するに至る、其の豪氣の未だ消へざる、以て見るべし。然るも彼れの內閣に入れる、疾く既に薩長の藥籠中の者なるに、自ら之を知るの足らず、却て能く其の

後を承くるに堪ふと謬り信ぜり。當時內閣動搖して元老の間紛擾を極めしも、實際の勢力は依然他に存じ、彼れや究境一の伴食に過ぎず、內閣を引き受けんと上言せる、皆な密かに指笑し、則ち大に眄めしと雖も何の効なく、事猝かに御前會議に決して後繼內閣成り、幸に舊のまゝ一椅子を占め得しも、既に全く無勢力の者と化し、當年の意氣猶ほ消磨せずして之を攄ぶるに術なく、空しく煩悶して歿せり。世間の廣き、之に似て小なるもの擧げて計へられず、往年自由黨に在りて東奔西走したる者、壯士死せずんば已む死せば則ち大名を擧ん、自由か死かと叫びて跳躍したる豪傑等、今將た何の躰たらくなる。腕を廢して餘勇の猶ほ存するを示すも、皆な既に檻中の物たり、食餌を擇びて爲政者に迫ることあれど、而も何の憚らるゝ無し、時ありて憤悲し咆哮する、徒らに嗤笑を招くのみ、憐むに勝ふべけむや。

學者として位置を作れる者、亦た之と同じ、德川氏の歷史が政治家の歷史たるよりも寧ろ學者の歷史たるは、其の學者に頗る重んずべき者ありしの致せる所、中江藤樹伊藤仁齋共に布衣、熊澤蕃山祿を得て仕へしも、元と明君の知遇に感じて一藩の政治を改革し、延て天下の勢を變ぜんとしたるもの、全く失敗に終りしと雖も、單に斗米に意なかりしや明白、之を外にし大儒の稱ある者にして能く五百石を受けしは極めて少く、春臺の若き猶ほ二百石にて甘んぜんとしたり、蓋し學者の意氣俸祿の上に存せず、道を以て任としたるなり。刻苦勤勉の常ならざりしより觀る、數百石の俸祿は甚だ少しといはざるを得ず、久しき準備を以て僅かの報酬に安んず、即ち其の根柢の鞏くして世に伸ぶるを得る所以、林氏は約んど萬石の身分なりしかど、而も其の然ると共に幷せて學者たるの力を喪ひ、後ち多く言ふに足る者無かりし。固より幾多の學者、卑むべきもの少からず、束脩を之れ求め、祿仕を之れ欲し、奔競して售るに急に、隨ひて其の位置愈〻低下し、幇間に類せるもあり、詩として錢を得るに專らなるもの、錢を納れて選に入る江君錫、價を待ちて文を作る龍子明の若き、猶ほ稍〻可なる部に屬す、其の地位の一般に低かりしは寧ろ當然なりとす。

今時學者文士にして往々言を立つる者あり、而も其の言を立つる專ら己の地位を顧み、譴責を被むるの恐れある、則ち非を知るも知らざる爲ねし、時には僞飾して其の非を蔽はんと勉む。倘ほ或る者は商人に雇はれ、そが隷屬に甘んじて驅使に從ふ、而して其の商人は良からざる手段を敢てして富を作りたる者、然るを其の命

に從ひて働くの身を以て好みて慷慨の辭を聞せ憤世の言を作す、此の若きは抑〻如何にか視るべき。斯る慷慨と憤世とは、恰も野師に使はるゝ虎の咆哮すると同じからずや、咆哮は眞の咆哮なりとも、勢や全く異なり、焉んぞ深く考ふる所無かる可けんや。

人は固より虎にあらず、徒らに咆哮搏噬するは不可、宜しく互に協同せざるべからずと雖も、協同の中亦た自ら自由の氣性を養はずんば有るべからず。アングロ・サクソン民族の他に比して能く成功する、眞に之を是れ養ふの深きに由る。他の種族は孰れも其の政府を制するに依りて能く之を制するを得れど、獨りアングロ・サクソンは然らず、よし其の政府を倒滅するにせよ、依りて之を制すること難く、個々皆な畏るべき力を具へ、各自其の進まんと欲する處に進まざれば已まず。秩序を貴び禮儀を正しくするは素と社會に缺くべからざるもの、則ち缺くべからざるも、自ら信ずるの篤き者は又た各〻其の性に應じて分別すべく、而して性を稟くる虎の如き者亦た必ず虎の如き生活を要すべし。世、竹に虎といへど、虎を捉へて二三竿の中に置くとて何の觀るべきある無し、獨り巨竹萬箇雲を挽む處、巨虎巧みに竹を避けて飛行するに至りては、其の斑毛の鮮麗なる、行動の迅快なる、皆な之に伴ひて趣味を添へ、自ら言ふべからざるの美觀を呈す。虎質なる者、茲に察すべし。

詠三傑

鬼趣餘桑雌雄中。飄然去與赤松從。
老翁化石亦多事。不似留侯遠絕蹤。
功狗鬪豪爭後先。中原逐鹿勢紛然。
獨收圖籍給糧食。起得炎劉四百年。
多々益辨氣矜々。休道街寃就死因。
曾是假王齊國日。淮陰日下已無劉。

骷髏の說

佛國巴里のカタコーム、地中に道を造りて骸骨を堆積し、廣さ五十九萬五千方米突、恰も市の十分一を占む。骨の收容せらるゝ無慮三百萬人、十字形を畫せるは僧侶の顱にて、各〻手足の骨の上に組み立てらる。中に五六百年以上を經過せしあり、革命の變亂に逢ひて殺戮されしものゝ混ずる約一百萬、皆な種々の創痕を印し、擊たれたる、斬られたる、彈丸貫通して孔を穿てる、火藥又は鉛の爲に變色せる、一見直に能く辨ずべし。地下深き處に在るが故に其の境や極めて幽凄、白骨の累々たるを睹て人生の果敢なきを感ぜざるあらず、無常を眼前に示すの切實なる、何物か之に若くべき。而も睹る者の人生の果敢なきを感じ無常の風に誘るゝ思ひあるは、偶〻骸骨を聚集し一處に保存せるに因りて然るのみ、人類ありて以來斯世に生息せしもの幾千萬億、皆な死して骨と爲り、碎けて土沙に塗れ、古きは全く泯滅して空に歸せり。凡そ人の生息せる處、必ず多少骸骨の地中に埋まるゝあり、東京にても、谷中は墓碑にて滿ち、新たに埋葬に充つべき空地なし、靑山は年々墓地の區域を擴むるも、擴まるに隨ひて速かに滿たされ、愈〻擴まりて愈〻滿たさる。之を外にし數多き寺院一として墓なきは無く、墓ある處、下に幾體の骨を埋む。寺院に管理せらるゝは尙ほ骨の幸にして存し得るもの、骨て埋骨處たりしも早く荒廢して跡を留めざるも多く、若くは死後既に久しきを經て骨棺と共に朽ち、新たなる棺の代り埋めらるゝ亦た少からず。江戸の創まりてより死して枯骨と爲りたる者抑〻幾何、二代將軍を始め大名の墓、旗本の墓、町人の墓、檢し來れば其の數幾許なるを知らず、生時種々の事功を擧げて死後史中の人と爲りしも之れ有り。而して墓中の人や既に消滅して片骨なきあり、又は現に骨たるあり、其の新たなる者も猶ほ生時の形體を損せざるは少し。之を一都市に見るも此の如し、進みて全國の上より觀れば、實に驚くべき大數たるべく、更に世界の上より觀る、其の數や愈〻大、殆んど計算の外にあり。今日尙ほ生存する者も、之を百年の後よりして觀る、皆な墓中の人たるべく、更に千年萬年、歲を經るに隨ひて彌〻墓中の人を加へ、唯だ益〻骸骨の數を多からしむ、爰ぞ獨り夫のカタコームを視て無常を歎ぜん。

無常の現はるゝもの、人體の骨のみにあらず、人の住する家屋も此と異ならず。穴居より以上、人あれば則ち家あり、或は木造、或は煉瓦、處により時により構造を異にす、而も能く久しきに續けるありや。東京の人家は三十萬と算せらるゝも、百年前の建築に係るは僅々のみ、二百年前なるは極めて少く、三百年に至りては幾んど絶無、御家騷動、大奥の女中、前供後供行列殿めしく玄關に入りし者、今將た何處に其の跡を求むべきか。伊豆韮山の江川の家は六百年前の建築に係ると傳ふ、固より數次の修復を經たらんも、昔時の構造依然として見るべし、而も是れ偶〻古骨の殘存するものゝみ。叡山に登る者は雜草叢裡に敗屋の散在するを看んこは昔し一山の偉觀たりし三千坊の殘滅したるもの、宛ら骨の草原に曝らさるゝ觀あり。畿内の地古刹を以て名あり、奈良法隆寺の若き其の一なりと雖も、而も同時代の建築に係れる幾萬の家屋は則ち如何に終はりしか。藤氏權を失ひて源平迭に榮へ、其間に華美驕奢を極めたりといふ家屋は安くにかある。皆な壞滅して既に久しく、偶〻一二の存するは塚墓の保存されたると同じ。由來我國の家屋は木造にして永く維持し難く、則ち造り則ち壞はるゝの當然なるに似たれど、更に他の煉瓦若くは石造の家屋に觀る、是れさへ能く百年以上を保つは少く、間〻數百年の久しきを保つあるも、亦た唯だ遺骨たるのみ。萬里長城は二千年前の舊物、久しきに續ける彼の如きは珍らし、而も外人の遊覽する處は既に幾たびも修復を經、全く始皇時代の物にあらず、原物は西部に於て求め得べきも、既に已に荒敗して僅に形を留むるに過ぎず。アッシリアの遺物は今も時々發堀せられ、埃及のスフキンクス、噴火に埋沒せるポンペイの市街、亦た堀り出され、その他昔時の建築、器物の發堀さるゝ頗る多く、考古學者に資すること大なれど、是れ亦た骸骨の堀り出ださるゝと同じく、博物館等に於て衆覽に供せらるゝ、カタコームの衆覽に供せらるゝと差違ある無し。

斯る事唯だ人造の家屋器物に於てにあらず、夫の山といひ巖といふは甞て非常の變動に伴ひて突起せる所、或る者は火山と爲りて破裂し、或る者は地震に逢ひて陷落し、種々に形を變じ、乃ち盈立し、乃ち蜿蜒し、高低大小、形態萬狀。而して人の住居し及び必需品の資給を仰ぎつゝある平原は山上に降下せる雨の流がれて土砂を運び、次第に層積して沃土を作り、遂に雜多の植物を暢茂せしむるに至れるもの、

嘗て多くの働きを爲しゝ跡の殘存せるに外ならず。筑波の若き、富士の若き、山といふ山、皆な各〻一の遺骨たり、大雨降り注ぎて頻りに土砂を瀉流し、茲に八州の野を作りぬ。崑崙の山脈及び附近の連山亦た然り、降雨群峰の沙を洗て低地に周流し、相ひ合して揚子江の洪流を作す、流域十數萬方里、瀰茫たる沃壤以て幾億の民を養ふ。更に五洲何の地に觀るも、高山の麓、大河必ず源を發し、大河の注ぐ處、沃野乃ち遠く亘る。今代の地理を形成する所のもの、凡べて或る力の運用されたる遺跡にあらざる莫し。我が地球も幾萬々年の昔に在りて月球にまで擴延し、之を包括し居たるに、爾後漸次縮少して今日の狀を作すに至る。混沌たる時代に溯れば遊星と共に燃燒せる太陽の瓦斯躰中に包容せられ、而して其の太陽も亦た嘗て一層大なる太陽の瓦斯躰中に包容せられき、現に空を仰ぎて星雲の點々するを見、比較して以て我が開闢を想察するを得ん。然るも昔時の過ぎ去りたる跡は大概湮滅して尋ぬるに難たく、今日目擊するを得るは九牛の一毛に足らず、多くを觀測せんとする、如何に勢して勉むるも竟に得て能くせざるべし。世又た世、代又た代、星遷り物換りて暫くも止まらず、其の相を變じ、其の跡を沒し、唯だ僅ばかりの名殘りを

留む。覆ふ所の天も此の如くして數〻變じ、載する所の地も此の如く數〻更り、兩介の鹿物一として形態を易へざるあらず、況んや生々の最たる人類をや、況んや其の人類の建造せる所のものをや、珉滅して痕を留めざる、怪むを須ゐず。泯滅して痕を留めざるを以て無常を感ずといふが、然らば形體の永く變せざるある、則ち其の故を以て之を可とせんか、山嶽の嵯峨として聳ゆるを看、無窮に亘りて變はらざるを欽羨すべきか、ピラミッドの空に尖するを視、萬年を經て壞はれざるを歎賞すべきか、活力の既に去り單に骸骨を存ずると等しきの果して何の幸とすべきある、骸骨と化して曝さるゝこと、抑〻如何の利益かある、枯骨の殘存すること唯だ其れだけに止まらば、其の殘存するは殘存せざると何の擇ぶべきぞ、寧ろ滑稽諧謔の材料に供せられて終はるに非ざるか。彼が如くして殘れる骨は多くの消滅せる中に在りて偶然に存ぜるもの、作用は已に過ぎ去りしなり。

今夫れ山巒へ川流る、其の峨々として高峻に、汪洋として洪涸なる、素と非常なる力の表はれし所、其の非常なる力は嘗て非常なる働作を成したるも、目下唯だ其の跡を測るのみ、百萬年の事業何を以て之を見ん。ピラミッドは人の力を役して物

を遠きより動かし來りし跡の殘れる者、四邊の地には蒼々たる蒸民の勞作し衣食し、生を遂げしなり。其の力や得て見ること能はざれど、其の後世の開化に與かるありしや大なり。舊き家屋の殘りて幾百年前の形を存するは往々之れ有り、皆な嘗て或る人の住居して種々の運命に接し種々の事功を成しゝもの、其の人逝きて其の家何の記すべきなく、而して逝きし者は觀るべからず、若し觀るべきある、即ち遺骨に過ぎず。今の枯骨は嘗て紅顏にして生氣滿ち、能く行步し能く活躍せしもの、擲けたる一片の骨、何の用なしと雖も、皆な一たび或る力を備へ或る事を成しゝなり。太初よりして生死せし人類幾萬々、少許の骸骨の殘存するも、最大多數は疾く分解して消滅せり。則ち消滅せるも、其の曾て生息したりしは實に當代の世界に社會の存在する所以なり。現に生存する人類十數億を以て計へらるゝも、皆な久しきを待たず死して消散し、百年の後に一空に歸し去るべきが、而も社會は益〻進み、歳月と與に愈〻進善せん。壯麗宏傑、牢固壞るべからざる大厦を構へたる者、其の身死して則ち改造せられ、往日の面目を存するの少けれど、たとへ舊の儘なるを得るも其の人に益すべきやは思束なし。其の人ありて其の家ある者にして、全く改造せらるゝとも、其の人の力は何の處にか殘存せずばあらず、或は物質の子孫と爲りて存し、或は冥々の感化となりて殘り、以て當世に補ひしに加へ更に後世に及ぶあり。歴史ある社會は斯る力の積累せるもの、敗屋あるの謂に非ず、枯骨あるの謂に非ず、而して其の力は目に見んとして遽に見るを得ず。

生れて英雄豪傑と稱せられ、雄才大略を縱にし多くの偉業を遺しゝ者、今將た何の狀を留むる。物の目に映ずる無く、偶〻有りとも、一塊の骨のみ、而して其の骨は英雄に於て何の關するある。彼れ英雄は斯の若き白骨を殘しゝが故に英雄たるに非ず、其の本分は自ら他に在るありて彷彿の間に尚ほ人心に存す、古來幾多の英雄豪傑代はり起れる、後人或は其の人と爲りを追慕し、或は其の人に私淑し、之に對して思ふこと現に生存する人に於ける如し。若し現在の社會に過去なるものゝ存せざる、各人の感想は甚だ單純と爲り、將來の念亦た隨ひて薄し、唯だ過去にありて愈〻遠く、將來を察して愈〻遥に、然る後ち社會に趣味を加ふること愈〻多し。然るに過去幾千年幾萬年の往昔に起りしもの、之を何の處に見るべき、或る力の現出するありて種々の働きを演ぜしといふも嘗て現はれし力は最早見ること能は

ず、皆な見えざる者にして、遂に再び見るの期なし。昔者東坡赤壁に泛び曹孟德を懐ひて曰ふ、其の荆州を破り江陵を下り流れに順て東せるに方り、舳艫千里、旌旗空を蔽ひ、酒を釃ぎ江に臨み、槊を横へて詩を賦す、固と一世の雄たり、而して今安くにか在ると。而も其の跡の存在せざるは寧ろ當然といふべし、孟德は跡あるを以て雄ならず、當時に於て或る力を顯はし、其の力は依然として見えざる處に存し、而して見えざる力は東坡をして之を追懐して感慨惜くこと能はず、斯の言を發せしむるに至れり。然れども人の稱すべきは單に、後人に記憶さるゝの故にあらず、記憶に存ずるは偶然に出づること多く、一層偉大の人物にして堙滅聞えざる少しとせず、後人に記憶せらるゝの必ずしも稱するに足らざる、猶ほ數百年間保存せられたる骸骨の特に欽するに足らざるが如し、獨り事功を遂成せし力は延て遠く後代に及び、人の意識に存せざるも以て無しとするを得ず。地球は斷えず旋轉し、他の遊星も亦廻りて止まざれど、之を廻轉せしむる動力は決して目に見えず、呼びて引力とするも謂ゆる引力終に見ること能はず、目に見るの深く稱するに足らざる以て少しく察すべし。事物の變遷は歳と共に益ゝ繁し。而も變遷とは何ぞ。種其の形を失ひて木となり、木其の形を失ひて家となる、形を失ふと雖も、存する者は自ら在るあるなり。

明治四十三年二月廿五日印刷
明治四十三年三月　九　日發行

《正價金壹圓》

著者　三宅雄二郎

發行者　高島大圓
東京市小石川區原町六番地

印刷者　佐久間衡治
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地
振替東京口座一五六八六番
電話番町二六〇八番

丙午出版社

前文部次官　文學士　澤柳政太郎先生新著

◎退耕錄

定價金壹圓　郵稅金八錢

本書は先生が實歷上百般の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝せられたるものにして諷刺あり啟蒙あり感慨あり痛罵あり氣焰あり理窟あり警拔にして淋漓せる觀察あり大膽にして深健なる斷案あり言はんと欲する所は盡ひ盡くして毫も時勢に囚らず謹に憂國警世の大文字なり經世家教育家宗教家及び現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず。

文學士　渡邊又次郎先生著

◎最新論理學

定價金一圓廿錢　郵稅金拾貳錢

本書は斯學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はんが爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして內容の整頓せる簡潔平易なる叙述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大著なり又關外に宜敷なる題目を掲げ發來に資料を對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし。

東洋大學講師　釋清潭先生著

◎寒山詩新釋

定價金五十錢　郵稅金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ禪か是れ詩か是れ佛か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として拔けざることや著者猶深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし。

文學博士　村上專精先生著

◎女性訓

定價金四十錢　郵稅金六錢

本書の內容は、天職、中庸、貞操、敬神、師傅の五訓から成て女子應有の教育となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女性の缺點を攝み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡そ世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なりとす。

文學博士　村上專精先生著

◎誠のしるべ

定價金四拾錢　郵稅金八錢

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道德も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその餘る所以を詳記せらる者も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

文學博士　村上專精先生著

◎自信錄

定價金五十錢　郵稅金八錢

これ博士の新著にして又實に博士が信仰の告白なり盲々己の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまず筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく盡べて盡さゞるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて窺ふべく敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし。

文學博士　法學博士　男爵　加藤弘之先生著

◎道德的宇宙觀

定價金七十五錢　郵稅金八錢

昨年八月「哲學雜誌」と共に發表を刊行せし以來其批評檀々として既に數十種に上れり仍て今般その批評に對して更に批評を試みし單なる二大問題を擧げて讀者にその解答を乞へり其皆教が迷信なりや否や又哲學觀に有害なりや否やはその解答の如何によつて解決せらるゝを得べしと信ず大方の君子賞れて批評せらるゝこともあらば幸甚。

明治四十一年七月　著者　加藤弘之敬白

ワーナー、フアイト氏原著
東洋大學講師　中島德藏先生述

◎解說批評　倫理學原論

定價金五十五錢　郵稅金八錢

ワーナー、フアイト氏の『倫理學原論』は快理論と觀念論との二大立脚地の調和を試みしものにして理論的に卓拔の見に富みしのみならず又當時社會の實際問題を提へてこれに明快なる解答を與へし一新好著なりこれを以て吾國にても大島學士の譯譯によりて已に紹介せられつゝあり然るに譯文に慣れぬ讀者は往々その眞意を解する能はざるを歎息としこれが解說を求むるもの少からず仍て一々質疑解答の勞を省かんため各篇各節の末に進うて冗ど各節毎に其の大意を取り最も簡易に明瞭に讀者をして原著者の意を會得しめむと力め且つ讀過禁錄の際卑見を以てこれに批評を試みたるものは本書なり。

明治四十一年七月　講述者　中島德藏敬白

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎氏序　阿滿得壽先生著

◎悉曇阿彌陀經

定價金壹圓　郵稅金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち梵語經典大乘經なり。特に悉曇と經語せしは新勸梵字に簡ぼんが爲めなり。梵文に加ふるに漢字和訓字音を附し脚註には高博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂正本、辭書、唐梵二譯を掲げたり。學者此の書に依れば、悉曇學の一端を窺ふに易からん。

前外務大臣伯爵　林董閣下纂譯
譯釘シルクグロース

◎修養乃模範

定價金七十錢　郵稅金八錢

今の人何故に修養せざるべからざるかを知らざるもの少しと雖も一その如何にして修養すべきかに至つてはこれに迷ふもの頗る多し一本書は主として古聖前賢が如何に修養したるかを敎へんが爲一その美觀逸話を筆譯したるものなれば以て青年自修の良師友たるべく以て敎育家宗敎家が講壇に用ゐる例話の寶庫たるべし

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

◎道德と陽明

定價金七十五錢　郵稅金八錢

本書は主觀二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を闡明して餘蘊なく道德の工夫修養の方法皆學の用心精神錄的人格養成等一として備はらざるなし眞に是れ精神界の指南針にして亦實踐道德の指導者たり。

東京帝國大學講師　文學士　常盤大定先生著

◎釋迦牟尼傳

定價金七十錢　郵稅金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳說なり、世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖も、これ等の傳說が、古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見れば、その裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし。此著は、主として、是等の傳說の起原を尋ね、意義を究め、南北兩傳、大小兩乘の相違を比較對照し、以てこの千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を除へむとするに在り。著者當經大定先生夙に篤學能文を以て聞え、殊に佛傳の研究に從ふものこゝに年あり、此著の價値、蓋し推知し得むか。

アー、エフ、ステンツラー先生原著エル、ヒッシエル先生增訂
ドクトル、フイロソフイエー　荻原雲來先生譯補

◎梵語入門

定價金壹圓　郵稅金八錢

歐亞百語の源泉を窮めんと欲する人は梵語を學ぶべし、宗教の千態萬狀を知らんとする人も梵語を學ぶべし、東亞文明の根據を探らんとする人も梵語を學ぶべし。

我邦一部人士の梵語を學ぶものあるも彼等は或る歐語の梵文典を使用す、されど歐語梵文典を用ゐんは、第一歐語を學ばざる可からざる不便あり、第二假名低廉ならず、今以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初步たらしめむがために、創めて本書を公にす、自今以後、苟も英字母二十六を讀み得る人は、僅少なる代價を拂つて、悉く梵語を學ぶを得べく、梵本を讀むを得べし。

前文部次官澤柳政太郎先生序
スタンフォルド大學總長ジョルダン博士原著
マスター、オブ、アーツ中村平先生譯

◎人物の修養

定價金五十錢　郵稅金八錢

ジョルダン博士は當今世界有數の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるゝ紳士なり　我國人がその所說その意見を知らむと欲するの情亦に之を知ることに依て利すること尠からざるは言を俟たず大方の君子賞くは本書に對し尊敬と同情とを表して博士に報ゆる所あれ。

東洋大學講師　境野黃洋先生著

◎補增聖德太子傳

定價金五十五錢　郵稅金八錢

佛教史家として夙に名名ある境野先生が其の燃頭なる史眼と博識せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を叙述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確汎に他に其匹を見ざる所。

マクス、ミユラー博士原著
佛教大學教授　文學士　清水友次郎先生譯

◎宗教學綱要

定價金五十五錢　郵稅金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マクス、ミユラー博士の原著を譯本とし題して譯し題して教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の良書なり。

堺利彥、森近運平兩先生共著

◎社會主義綱要

定價金四十錢　郵稅金八錢

近時社會主義の理論及運動は頗る世人の注意を惹くに足るものあり と雖も未だ其學說の概略をも窺ふことなくして徒らに附和雷同する者、或は輕々之を攻擊するもの頗る多く、殊に多少の教育ある人士にして社會主義に對して評論を試むる者の如き其無知實に驚くべきものあり。然るに此等人士の一讀すべき邦文の書册極めて少なく僅々之あるは二三の譯書と時事に對する社會主義者の評論に過ぎず。科學的社會主義の原理、各問題の解釋其史的發展及現今の時潮流に就いて系統的に叙述したるものに至つては、假令之あることなし。著者此缺陷を補はんと欲して筆を執り平易簡明の文を以て深遠なる學理難解なる問題を解釋したる者即ち此書也。特に反對論に對する辯駁と社會主義運動の現狀との二章は斯主義に對して毫も興味を有せざる人と雖も見落すべからざる處なり。今や燈下靜思の好季、社會各階級の人士に向つて此書を薦む。

楠　惠勝先生著

◎淨土教發達史論

定價金六拾錢　郵稅金六錢

精確なる史料により、明瞭なる識見を以て、前人の等閑に附したる印度に於ける淨土教の淵源を究尋して東漸以來こゝに二千歲の間誤傳せし歷史の謬見を破し、佛教歷史の眞相を顯彰し、大乘非佛說問題に斷案を下したる、空前の研究なり。嗚佛教これにより粉碎せられ、眞佛教、これにより躍如たらん。淨佛教これにより假面を剝がれ、新佛教、これにより光輝を放たむ。讀ふ精讀を賜へ。

〈博士〉井上圓了先生新著　○繪はがき寫眞版數十葉入

◎西航日錄

定價金卅錢　郵稅金四錢

是れ、井上博士の洋行士産なり、歐米に於ける、教育、宗教、文學、政治、經濟等の現況は、博士が周到なる觀察と、輕妙なる文辭とにより て、此に躍動す。征露の戰爭に於て、武名を世界に輝したる日本の國民は、また世界の大勢に通ぜざるべからず、請ふ一本を購へ。

楚人冠　杉村廣太郎先生著

◎七花八裂

定價金六十錢　郵稅金八錢

著者曰く、此書は、著者が、名に戀れず、戀に泣かず、半殘の積み貯ほず、半個の魂に庇れず、天上天下、一點半畫も、他の觀肘感慨を受ることなくして、縱に我が見得底を披瀝せる者、過去十三年間の漫文漫詩、收めて此の一卷の中に在り。著者の如く貧乏し、著者の如く墮落せんと欲する者は、請ふ此書を讀め。

文學博士　村上專精先生編

◎科註原人論

定價金十二錢　郵稅金二錢

◎科註大乘起信論

定價金十六錢　郵稅金二錢

右の二書は共に能記者入れ等に便ぜんがため、本文の上下に空白を存し置きたれば、學校の教科書、學會の講本として、最も適當なり。

黒岩周六先生講演　丙午出版社編

◎人生問題

定價金五十五錢
郵税金八錢

人生とは何ぞや、是れ平古の疑問なり、哲人之を說き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲益々密に、苦悶の人愈々多からむとす、然るに現代思想界の巨斗黒岩先生、自ら人生問題に逐者して、疑問の源泉を探り、大に其深趣を得て、茲に此書あり、叙る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天啟の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、迷に來つて此編書に接せよ、庶幾くは平穩と滿足と活力とを得て、混く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

新公論社編　○附錄學生銷夏法

◎男女學生氣質

定價金二十錢
郵税金二錢

此書は坪内雄藏、柳橋柳子、幸田露伴、村上嘉猪、三崎田亂佐子、佐治實然、山路愛山、ふさ子、中村五百子、鳩山春子、本多庸一、高橋文雄、小杉天外、中島歌子、三郎、前田慧雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、弱邊鐵一郎、戸川殘花、鈴木券太郎、石黒忠悳、巽孝之助、加納久宜、古川清、泉鏡花、田中治六、加藤咄堂、塊野黄洋、中島德藏、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

文學博士　松本文三郎先生著

◎宗教と哲學

定價金四十五錢
郵税金八錢

本書全篇十有餘章まで唯宗教と哲學との、根本問題に起し宗教と道德研究と信仰等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論理にある事を闡明す、蓋し病弱なる現代思想界は此書に接りて始めて元氣の回復を求め得むなり。

獨逸哲學博士ポール、ケーラス先生著　鈴木大拙居士譯

◎阿彌陀佛

定價金卅五錢
郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや、是れ佛教の根本問題也、ケーラス博士その影響を掃ひ殆ど小說的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその欧米讀書界に好評喧々たるもや、碩社會に十年博士と居を同じうし故も博士と親善なる大拙居士が頃はして地和譯を得たり、豊當に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや。

文學博士　三宅雄二郎先生著

◎小泡十種

定價金四十五錢
郵税金八錢

博士の學殖富贍に博士の見識卓越に博士の文章超凡なること世既に定評あり今この學と識と文とを卸倒してこの著を作す政治を論じ宗教を說き文學を講ず人物を評すその筆の向ふところ流れては滔々盡きざる大河となり、敢じては縱橫限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著なり。

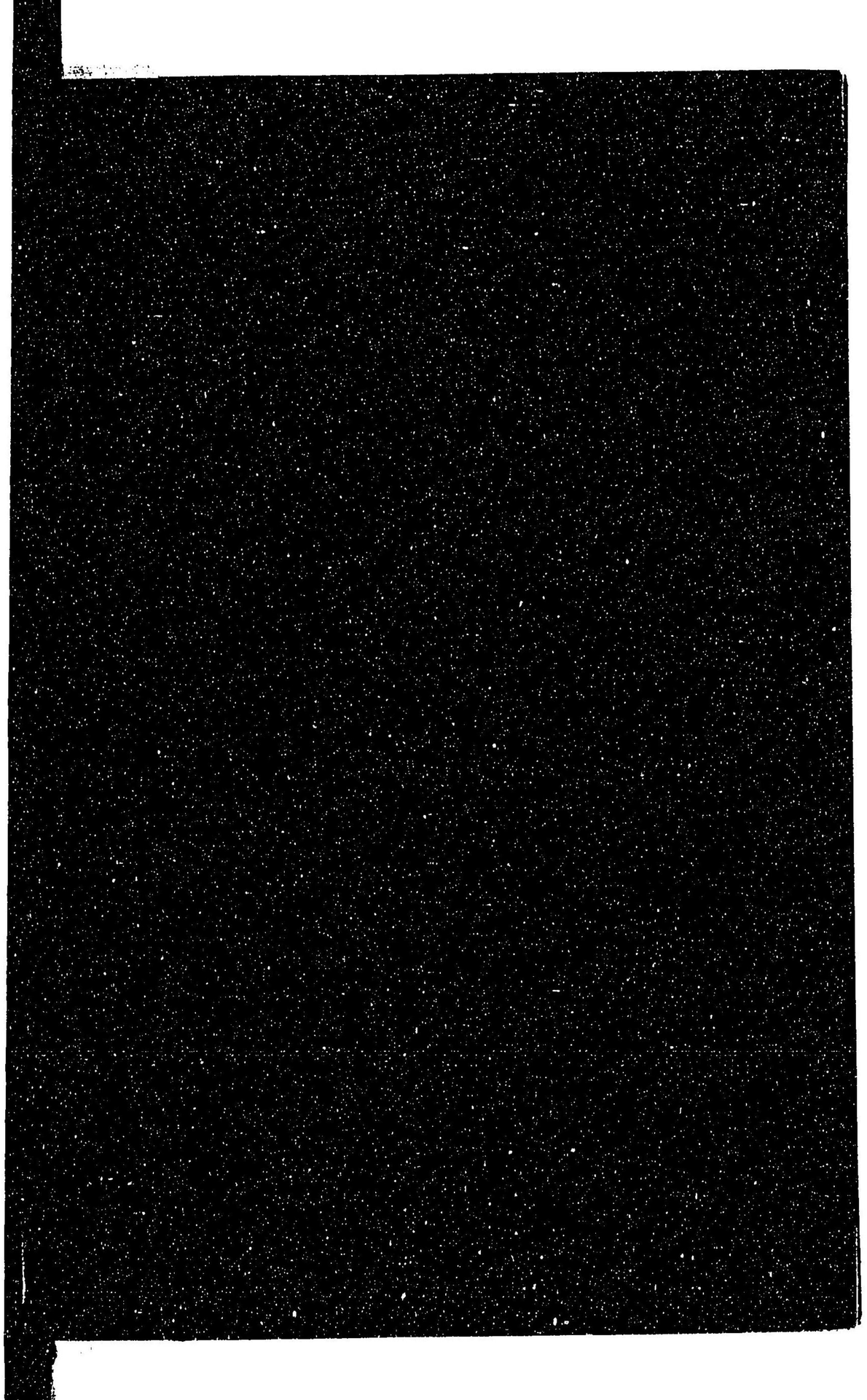
ペークマン先生原著　杉村縱橫先生譯補

◎改訂增補強肺術

定價金四十錢
郵税金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、欧米に於ける最新式の體力養成法を讀め、此書に六の特色あり。
第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。第四、勞力を要せざること。
第五、實文一致なること。第六、絶ふり假名付なること。
故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

328
187



328
187

003827-000-5

328-187

偉人の跡

三宅　雄二郎／著

M43
ACE-0005

'36 10.23